

新潟県中学校教育研究会

令和6年度 指定研究（2年次）

成果の概要報告書・資料

国語・数学・道徳・美術・技術・家庭・特別活動
・総合的な学習の時間

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）

（美術・技術・家庭・特別活動・総合的な学習の時間は指定の2地区のみ）

令和5・6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 丸山 徳子
(上越市立直江津東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 国 語
2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立春日中学校
4 研究主題

課題を「自分ごと」として捉え、思考の過程を楽しみながら考えを深める生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 主題設定の理由

県中教研国語部の研究テーマ「課題を工夫し、伝え合う場を充実させた授業デザイン」を受け、上越地区では、「伝え合う場の充実」という点から研究を進めてきた。上越地区の生徒の傾向「話し合いは好きだが、考えの伝え合いで終わってしまうことが多い」を基に、一年次の研究を行った結果、会場校のアンケート（R6年度初めに実施）では、話し合いに対する肯定的評価が58%（R5年度53%）となった。一方で、前年度研究対象とした古典については、今年度「得意」と答えた生徒が11%（R5 14%）、苦手と答えた生徒が49%（R5 46%）であった。関わり合いに対して好意的な生徒は増えたものの、自分の考えを伝えることに対してはまだ受け身の生徒が多く、特に古典教材に対する苦手意識はなかなか薄れていないという実態であった。そこで、一年次から継続し、「伝え合う場の充実」に向けて、「一人一人に考えの広がりや深まりのある話し合い」を、求める姿として設定した。

この姿を実現するために、引き続き、①安心して発言できる雰囲気づくり、②「自分ごと」として探求したくなる課題の設定、③互いの考えを吟味する視点や手順の習得、の3つをポイントとし、「思考の過程を楽しみながら考えを深める」生徒の育成を目指して、研究を進めた。

(2) 目指す深い学びの姿

研究主題を受けて、「生徒が、①課題に主体的に取り組み、②思考の過程を楽しみながら考えを深めたり広げたりし、③最後に、根拠と理由を明確にしながら自分の考えを再構築できる」姿を目指した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

(1) 研究の方法

今年度も、課題を自分ごととして捉えにくい「古典教材」を研究対象とした。「深い学びの姿」の実現のために、①「課題」（技法No.3）・②「伝え合う場」（技法No.8、10）・③「自分の考えの再構築の場」（技法No.13、15）の3点を工夫し、「思考の過程を楽しみながら考えを深めていく」学習過程を模索した。そして、授業公開を通して、工夫の効果を検証することとした。

(2) 研究の内容

① 課題の工夫（深い学びの技法No.3）

- ・ 単元を貫く課題として「旅の同行者として芭蕉の考えや行動を見つめて、『おくのほそ道』の魅力を探り、後輩にその魅力を伝える推薦文をまとめる」を提示する。
- ・ 毎時間、「旅の同行者として、芭蕉の行動や考えについてどう思うか」を投げかけ、読解がすすむにつれて変容する自分の考えを確かめさせる。
- ・ 根拠（教材文に書かれていること）と理由（なぜそう考えるのか）を明確にして自分の考えをもてるように、ワークシートを工夫する。

② 伝え合う場の工夫（深い学びの技法No.8、10）

- ・ 4人グループを編制し、根拠や考えの違いを視覚化（教材文に線を引く、考えを数直線で表す等）し、「根拠と理由を含めた互いの考え」を比較しながら探求できるようにする。

- ・ 話合いの進め方を提示し、互いに問い返しをしながら、話合いを進めるようにする。

③ 自分の考えの再構築の場の工夫（深い学びの技法№8、10）

- ・ 課題について、「自分の考えをもつ→グループで話し合う→全体で共有する→自分の考えを再度まとめる」のサイクルを繰り返し、作品について自分なりの解釈を作り上げ、最後に後輩への「推薦文」をまとめる。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 生徒にとって時代や言葉の壁のある古典学習について、一つのモデルを提案することができた。
- ・ 「①課題の工夫」で、「同行者」の視点を与えたことが、課題を「自分ごと」として考えることにつながった。公開授業では、「同行者」の捉えに生徒間で差があったが、授業を重ねる中で、同行者（芭蕉の弟子）の視点が生徒の中に根付いていった。最後の「推薦文」では、同行者の立場で、『おくのほそ道』や芭蕉の生き方の魅力を紹介できた生徒が多かった。「③自分の考えの再構築の場の設定」について、6(2)で示した学習サイクルも効果的だったと考える。
- ・ 「②伝え合う場の工夫」で、話合いのスキルの定着化を図り、問い返しの習慣化を進めた結果、2年間の研究の中で、関わり合って考える姿が増えてきている。また、ワークシートの工夫により、自分・他者・テキスト・時代と対話しながら考えを深めることができた。

(2) 課題

- ・ 古典教材は、「生徒にどこまで知識を与えるか」が課題である。与えすぎると、生徒は「授業者の考えの二番煎じ」のような考えになってしまうため、生徒の自由な発想が期待できる程度に知識を与え、さらに「①課題の工夫」で、「生徒が他の人の考えを聞きたくなる」課題づくりを、引き続き工夫していく必要がある。
- ・ 「②伝え合う場の工夫」では、生徒のグループワークにおけるコーディネート能力を鍛えていくことができるように、学校全体で話合いのスキルを共有・実施していく必要がある。国語科だけではなく、どの教科や領域でも同じ方法で話合いを進めていくことで、考えを練り上げる話合いができるようにしていきたい。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・ 会場校で生徒に対して「国語についての意識調査」を2年間行い、生徒の傾向や1年次の研究による変容を確かめ、それを基に研究構想を改善していくことができた。
- ・ 毎回の推進委員会の協議の視点が明確で、協議を積み重ねながら、研究を深めることができた。
- ・ 各推進委員がプレ授業を相互に参観し合うことで、指導案や授業を練り上げることができた。
- ・ 研究会で、小学校の先生方と協議をしたことで、話合いのさせ方や授業づくりについて、様々なヒントを得ることができた。また、「学びの連携」という点からも、有意義であった。
- ・ 上越教育大学学校支援プロジェクトの大学院生に、授業づくりや推進委員会に参加してもらうことで、充実した取組や協議ができた。

(2) 課題

- ・ 推進委員会に、若手教諭に参加してもらうことができなかった。若手育成や研究の引き継ぎも兼ねて、若手の参加を促すような手立てが必要だった。
- ・ 地区の多くの先生方に興味・関心をもってもらうために、毎回の推進委員会の協議結果を公開できる場があるとよい。研究会時だけでなく、推進委員相互の授業参観にも気軽に参加できようようにして、研究の裾野を広げていきたい。

資 料

- 1 部会名 国 語
 2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立春日中学校
 4 研究会開催期日 令和6年11月12日（火）
 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学教職大学院・教授	佐藤多佳子
〃	上越教育事務所学校支援第2課・指導主事	草間 啓
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津東中学校・教諭	丸山 徳子
(3) 会場校責任者（授業者）	上越市立春日中学校・教諭	笠尾 民子
(4) 研究推進委員（授業者）	上越市立春日中学校・教諭	後藤 弘彦
	上越市立城東中学校・教諭	八木 清美
	上越市立城西中学校・教諭	小山 綾子
	上越市立柿崎中学校・教諭	赤塚 啓子
	上越市立中郷中学校・教諭	松井 和子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月5日 春日中学校	14	1年次の研究の成果と課題の確認、今年度の研究の流れの確認、今年度の研究の工夫点（伝え合う場の充実）の検討
2	7月2日 春日中学校	12	研究会の流れの確認、「C l a s s」原稿の検討、研究会公開授業教材における「深い学び」の検討、課題の工夫
3	8月6日 春日中学校	8	第2回全県部会の内容伝達、研究会の準備日程と分担の検討、研究会公開授業指導案の検討
4	9月6日 春日中学校	15	研究会の当日日程と当日分担の確認、協議会の協議題と進め方の検討、研究会公開授業指導案の本時の展開の検討
	10月9日 城東中学校	5	（授業研究会として実施）城東中学校八木清美教諭による授業公開（「夏草」）授業公開を基にした、研究会公開授業の本時の展開の工夫点や改善点の検討①
5	10月17日 城西中学校	14	城西中学校小山綾子教諭による授業公開（「夏草」）授業公開を基にした、研究会公開授業の本時の展開の工夫点や改善点の検討② 研究会の運営・参加者の意見集約等についての確認・検討
	10月23日 中郷中学校	6	（授業研究会として実施）中郷中学校松井和子教諭による授業公開（「夏草」）授業公開を基にした、研究会公開授業の本時の展開の工夫点や改善点の検討③
6	12月6日 春日中学校	5	研究会の運営の振り返り、2年間の研究の成果と課題についての協議

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 8 8 ） 名	(3) 小学校・高等学校教員 （ 4 1 ） 名
(1) 郡市内中学校会員 （ 3 1 ） 名	(4) 教育委員会・センター （ 1 ） 名
(2) 他郡市中学校会員 （ 4 ） 名	(5) その他（上越教育大学・教育事務所）（ 1 1 ） 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年4組	夏草—『おくのほそ道』から—	笠尾 民子
3年6組	夏草—『おくのほそ道』から—	後藤 弘彦

9 全体協議会

協議題	指導者	司会者	提案者
本時の課題や交流の手立ては、課題を「自分ごと」として捉え、考えを深めるために有効だったか	上越教育大学教職大学院 教授 佐藤多佳子 様 上越教育事務所学校支援第2課 指導主事 草間 啓 様	上越市立城東中学校 八木 清美 教諭 上越市立城西中学校 小山 綾子 教諭	上越市立直江津東中学校 丸山 徳子 教諭

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 北 村 紗 月
(学校名：魚沼市立堀之内中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国 語

2 郡市名 魚沼市 3 会場校 魚沼市立小出中学校

4 研究主題

情報を整理し、自分の考えを表現できる生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領（平成29年3月告示）では、〔知識及び技能〕の指導事項に「情報の扱い方に関する事項」が新設された。学習指導要領解説では、話や文章に含まれている情報を取り出して整理したり、その関係を捉えたりすることが、話や文章を正確に理解することにつながり、また、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながるとしている。

魚沼市の標準学力検査（NRT）の結果をみると、「情報を選び構成を考えて話す」「情報を選び構成を考えて書く」「文章を整え感想や意見を伝え合う」などに落ち込みがあった。

そこで、魚沼市では、「情報を整理し、自分の考えを表現できる生徒の育成」を目指して研究を進めてきた。昨年度の研究では、「ICTの活用」をキーワードに情報の整理に重点を置いて実践を行った。実践を進める中で、研究推進委員会では、情報の整理においては、ICTの活用の有効性を確認することができたが、ICTの活用に拘ることなく、既存の学習方法も織り交ぜて課題設定をすることが、さらに学習を深めることにつながると考えられた。

学習指導要領や昨年度研究を踏まえ、研究推進委員会では、目指す深い学びの姿を、「自分で情報を収集・選択し、それを根拠に自分の考えに論理性をもたせて伝える姿」と考えた。本単元では、情報の受け手としての視点をもとに、送り手として適切な情報の選択を行うこと、選択した情報をもとに、自分の考えを論理的に他者に説明できるようになることを目指して授業を設定していく。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

ポイント1 視点・観点・論点を設定して思考や表現をする（「深い学びの技法」のNo.3）

本単元では、資料Aを通して情報とは送り手によって「構成されたもの」であることを学んだ後、資料Bを通して、どのような意図で情報が構成されているのかを、観点を設定して比較する。これによって情報の受け手としての視点を実感的に捉えさせる。

ポイント2 学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする（「深い学びの技法」のNo.9）

情報が送り手によって「構成されたもの」であること、受け手としての視点を学んだうえで「魚沼紹介ポスター」を作成する。魚沼紹介ポスターにおいては、送り手として、文章の種類の選択、意見と根拠の関係、情報の信頼性などについて、何をどのように伝えれば効果的かを吟味し作成する。これによって情報の送り手としての適切な判断を身に付けさせる。

ポイント3 仲間と練り合いや練り上げをする（「深い学びの技法」のNo.10）

理由や根拠を示して論理的に説明する（「深い学びの技法」のNo.13）

「魚沼紹介ポスター」を作成したら、他者のポスターについてペアで検討する学習を行う。他者の発

表を聞き、内容や構成について検討することによって論理的思考を習得させる。検討時には、まなボードを活用し、受け手の捉え方を即時に書き込めるようにすることによって、より練り上げがしやすいようにする。また、意見と根拠の関係や情報の信頼性などを確認する点検シートを用意する。これに照らし合わせて検討を行うことによって、自らの考えを整理し、根拠を明確にしながら伝え合う姿を期待する。他者との交流後には、もう一度考えを整理しポスターを作成する。個別学習と協働学習の往還を意識した授業構成によって、より考えが深まるようにする。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・(ポイント1にかかわって) メディアリテラシーに関する文章や広告の読み比べの学習を通し、情報の受け取り手としての視点を学んだことで、次の学習展開につなげることができた。また、市の協力のもと2年に渡り福島大学の佐藤佐敏教授から師範授業・ご講演をいただき、批判的なものの見方や、情報の取捨選択における視点の理解を深めることができた。
- ・(ポイント2にかかわって) 魚沼を紹介するポスターを作成するにあたり、「魚沼を知らない人に魚沼の魅力を伝える」という目的や、生徒自身が設定した意図(伝えたいこと)を効果的に伝えるために、提示した複数の視点を意識して情報収集・選択し、吟味する姿があった。
- ・(ポイント3にかかわって) ポスターのペアでの検討時には、収集した情報を根拠に自身の作成したポスターの意図を説明している姿があった。また、チェックシートにより複数の視点を明確に示したことで、どんな生徒でもアドバイスや良い点を見つけやすく、話合いが活発なものになった。ペアを変えて二度の話合いを行ったが、一度目の話合いで新たな視点を獲得することで、二度目はより広い視野で相手へアドバイスをしたり相手への説明を行ったりする姿が見られ、学びを深めることができた。検討時に、受け手の捉え方を書き込むためにデジタルツールではなくホワイトボードを活用したことで、即時性があり、話し合い重視の活動にすることができた。

(2) 課題

- ・(ポイント1～3にかかわって) 話合いでは、チェックシートに示されている視点以外の内容で対話がなされている姿も見られたが、ポスターの練り上げという点で、生徒たちはより多くの学びを得ることができたのではないかとこの新たな気づきがあった。活動内容や目指す生徒の姿により項目や使い方を吟味した上で、別の活動に今回のチェックシートを活用したり、あるいは生徒自身でチェック項目を考えて批判的にものごとを考えたりする活動につなげていくことが可能である。話合う班や全体での共有など、この活動を発展させていく段階では、ICTとアナログの特性をよく吟味し、使い分けていけると良い。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・研究会当日の役割分担を明確にし、当日は連携・協力して運営にあたることができた。
- ・会場校の先生方のご協力により、会場準備や駐車場などの運営も支障なく行うことができた。
- ・協議会において、協議内容を全体で共有する際に、模造紙をスクリーンに投影したことで、広い会場でも内容を把握することができた。

(2) 課題

- ・主題設定を早い段階で決められると、各校で足並みを揃えて研究推進にあたることができた。
- ・研究会の運営において、要項など過年度デジタルデータの引継ぎがあるとありがたい。

資 料

- 1 部会名 国語
- 2 郡市名 魚沼市 3 会場校 魚沼市立小出中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6年 11月 1日（金）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	中越教育事務所・学校支援第2課長	山崎 寿徳
	魚沼市教育センター・統括指導主事	江田 浩
(2) 研究推進責任者	魚沼市立堀之内中学校・教諭	北村 紗月
(3) 会場校責任者	魚沼市立小出中学校・教諭	上野 薫
(4) 県・郡市指導主事	魚沼市教育センター・統括指導主事	江田 浩(再掲)
(5) 研究推進委員(授業者)	魚沼市立小出中学校・教諭(授業者)	山本 祐作
	魚沼市立湯之谷中学校・校長	栃倉 敦
	魚沼市立湯之谷中学校・教諭	中川 恵名
	魚沼市立北中学校・教諭	柳沢 将洋
	魚沼市立広神中学校・教諭	小林 亮介
	魚沼市立小出中学校・教諭	松崎 豊

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月 4日／小出中	9	・1年次の成果と課題の確認 ・2年次の年間計画について確認。
2	7月 22日／小出中	10	・指導案検討
3	8月 20日／小出中	9	・研究会当日に向けた準備打ち合わせ
4	10月 8日／小出中	10	・プレ授業参観(授業者：山本祐作) ・協議会 ・研究会の運営と役割の確認
5	11月 1日／小出中	10	・研究発表会
6	11月 19日／小出中	9	・研究成果と課題のまとめ

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (57) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (21) 名	(4) 教育委員会・センター (2) 名
(2) 他郡市中学校会員 (34) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年B組	複数の情報を関連づけて考えをまとめる ～「魚沼紹介ポスター」を作ろう～	山本 祐作

9 分科会(全体協議会)

協議題	指導者	司会者
◎ 深い学びを実現するために、2つの手立ては有効に働いていたか。 ① 複数の視点を与えたことが、ポスター検討の場面において有効だったか。 ② ICTではなくホワイトボードを活用したことが、話し合いの場面において有効だったか。	・中越教育事務所 学校支援第2課長 山崎 寿徳 様 ・魚沼市教育センター 統括指導主事 江田 浩 様	魚沼市立小出中学校 上野 薫 教諭

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 及川 陽子
(学校名: 新潟市立濁川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国語部会

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立東新潟中学校

4 研究主題

「学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を使って考えを深め、
自らの成長を実感する国語科指導」

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

これまでに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践、授業改善が各校で行われてきた。対話を通しての学び合う活動は他者の考え方に触れることで、自己の考えを広げ、深める上で重要である。しかし、対話に重点を置くあまり、自分の考えを述べただけで深まりのない授業となってしまうことも多い。

このことから国語科では、①「言葉による見方・考え方」を生かすことのできる教育活動を設定すること、②生徒が思考を深めることのできる指導及び学習環境のあり方を意識し、上記の研修主題を設定した。

「言葉による見方・考え方」とは、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味づけることである。これを踏まえ、対話によって作品中での言葉がもつ意味や一つ一つの語句がもつ重要性などを理解・実感することを通して、深い学びにつながっていくことに気付かせたい。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

今年度は、2年生「漢詩の風景」3年生「君待つと一万葉・古今・新古今」の古典作品を扱う2単元で授業を行った。どちらも詩歌を取り扱っており、ともすれば教師主導の授業になりがちな単元である。そこで生徒が主体的に学びに取り組めるよう、以下のように授業を構成した。

2年「漢詩の風景」では漢詩の基礎知識や表現技法などを学習したうえで、教科書の漢詩を元に自分の思いに合った漢詩を創作し、それを練り上げる活動を行った。練り上げる際の交流活動を通して自分の心情に迫ったり、言葉を吟味したりして深い学びを目指した。(深い学びの技法 ③⑧⑩⑮⑰)

3年「君待つと一万葉・古今・新古今」では教科書で取り上げられた和歌の内容を理解したうえで、「今後、さらに100年読み継がれる和歌」を判定基準に「言の葉バトル」と称し、それぞれの和歌のよさを伝えるプレゼンテーションをコンペティション形式で行った。その過程で、歌が詠まれた背景とそこから現代に通じる思いを比べたり、言葉の響きのよさについて論じたりすることで「言葉による見方・考え方」を深めることを狙いとした。また発表時は和歌についてディスカッションすることで、より和歌に対する理解を深めたい。(深い学びの技法 ⑤⑨⑩⑬)

7 研究の成果（○）と課題（▲）

【学び合いの面から】

(2年生)

○生徒が自分なりの漢詩を創作し、考えをまとめて発表できていた。また、友達の作品にアドバイスをしあい、それを活かして学習内容を高め合う姿が見られた。

○自分の思いを伝えるために、よりよい表現になるよう言葉（漢字）を吟味しあっていた。友達のアドバイスで自分の作品に自信がもてたり、考え直せたりすることができ、自らの考えを深めることができていた。

○ICT 器機の活用があり、手立てとして有効に働いていた。

(3年生)

○生徒たちが「和歌の素晴らしさを伝え合いたい」という気持ちを持って生き生きと取り組んでいる姿が印象的であった。プレゼンバトルという手法、生徒主体での進行、根拠を持って自分たちで考

えるための手立てなど、有効に働いていたと思う。和歌を、現代、そして未来につながる文化として、自分事で捉えている様子が見受けられた。

- 調べたり感じたりしたことを、どう伝えたら効果的か、話し合いを活発に行って本時を迎えたのだろうと感じた。目的意識がはっきりしていて、「対話したいから対話する」ことができていたと感じる。自分たちの発表をすること、他の班の発表を聞き質問することなどを通して、考えを深められたと思う。

▲生徒からのディスカッションタイムが、既習事項や和歌の情景に寄り添った質問だともっと生徒の和歌に対する興味関心が高まるのではないかと感じた。

【言葉による見方・考え方の面から】

(2年生)

- 押印や対句などの漢詩の決まりを理解し、その決まりを守りつつも自分の思いを表現するためには漢字に対する知識や、漢詩の学習において作者の思いがどのような点に込められているかといった内容を習得していることが前提になるため、既習したことをフルに活用できる授業だった。

- 漢詩の推敲を生徒同士で行うことによって、自分の表現の良いところや改善点を実感し、言葉の意味や使い方を深く考える授業になっていた。

▲当てはめた言葉が正しいのかどうなのかが、判断はどうするのか疑問が残る。

(3年生)

- 言の葉バトルを組織したことで、生徒が選んだ和歌が詠まれた背景や和歌の意味を調べ発表するという学習を意欲的に行うことにつながっていた。その学習過程で、言葉による見方・考え方(和歌の鑑賞の観点)を使って、和歌に対する理解を深めていたように思えた。

▲「今後さらに100年読み継がれる」の判定基準が曖昧で、どの班も「共感できるか」のみ主張していたように思われる。

【生徒の振り返りから】

(2年生)

- ・返り点や送り仮名に注目して読んだり、書いたりすることができた。
- ・授業の話し合いの中で悩んでいた漢字が決まって押韻にできて良かった。
- ・漢詩の面白さを知ることができた。奥深い文学であると分かった。
- ・他の人の作品を読んで、背景や場面を想像しながら読む大切さを知った。
- ・自分の伝えたいことをしっかり伝えられるのが漢詩だと友達の漢詩を見て思った。
- ・漢字の一つ一つの意味の奥深さを知ることができた。気持ちや行動も漢字で表せると思った。

(3年生)

- ・解釈について深く考えることができた。
- ・作者独自の表現の方法を知ることができた。現代の人々より深い気づきがあるような気がする。(小さなことにも幸せを感じている。)
- ・現代も昔も変わらない気持ちがあるということが分かった。
- ・一つ一つの言葉に注目し、意味を考えていきたいと思った。(表現技法も含めて)

以上の意見から、深い学びとなる授業提案及び研究であったと考える。特に生徒の振り返りから古典に対する意識の変容が見られる。ただ「判定基準が曖昧」、「当てはめた言葉が正しいのかどうか、判断はどうするのか」などの指導側の改善点が上がった。学び合いを実施する際には、教師側が押さえないければならないことを明確にすることが大事であると再確認した研究であった。

8 運営の成果と課題

- 研究推進委員や協力校の協力で、指導案検討やプレ授業の内容を本時の授業で生かすことができた。

- 企画した講演会のテーマが「短歌」で、授業単元ともリンクしており、大変有意義な時間になった。

表現活動について生徒指導の側面からも話していただき、改めて表現活動の重要性を認識できた。

- Google Classroom と実際の参観の2方法で研究会を実施した。生徒が特別な状況で授業を行うことなく、授業に臨めたという点は成果である。

- 配信授業の方は事前に確認していたこともあり、聞きやすい配信にすることができた。

▲配信のために生徒同士のマイクの受け渡しがあった。このことがもう少し早く分かっているともう少し受け渡しについての指導ができたので、そこが改善点である。

▲2年生の授業では1つの班を定点で追ったので、オンラインで参観した教員からは「他の班の意見聞いてみたかった」という意見もあった。

- 1 部会名 国語部会
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立東新潟中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6年 11月 7日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・所長補佐	長谷川 聡実
	新潟市教育委員会・指導主事	志田 江利子
(2) 研究推進責任者	新潟市立濁川中学校・教諭	及川 陽子
(3) 会場校責任者	新潟市立東新潟中学校・教諭	小竹 玲子
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立東新潟中学校・教諭	堀川 航矢(授業者)
	新潟市立東新潟中学校・教諭	土屋 明善(授業者)
	新潟市立小須戸中学校・校長	南 昌弘
	新潟市立小須戸中学校・教諭	芳賀 勇雄
	新潟市立上山中学校・教諭	稲葉 丞
	新潟市立木戸中学校・教諭	早福 彩華
	新潟市立中野小屋中学校・教諭	小林 強
	新潟市立西川中学校・教諭	松浦 静恵

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月11日(木)/東新潟中学校	9	研修計画の立案及び指導案検討
2	8月20日(火)/東新潟中学校	9	指導案検討
3	9月26日(木)/金津中学校	12	2年プレ授業と指導案の検討
4	10月17日(木)/木崎中学校	10	3年プレ授業と指導案の検討
5	11月7日(木)/東新潟中学校	12	研究会及び講演会の実施
6	12月19日(木)/東新潟中学校	8	○提出された協議会での内容を推進委員で協議し、授業の妥当性について話し合う。 ○話し合った内容をもとに来年度の研修の方向性について話し合う。

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (48) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (36) 名 ※リモートでの参加を除く	(4) 教育委員会・センター (3) 名
(2) 他郡市中学校会員 (9) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年3組	語り継ごう私たちの「ハジマリノウタ」を ～漢詩の風景～	堀川航矢	3年1組	和歌のすばらしさを伝えあおう	土屋明善

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
講演会	短歌の取り組み	東京学館新潟高等学校 教諭 田村 裕 様	新潟市立上山中学校 稲葉 丞 教諭	

令和5・6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 五十嵐 美波
(学校名: 新発田市市立東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 国 語

2 郡市名 新発田市

3 会場校 新発田市立加治川中学校

4 研究主題

これまで身に付けてきた「読みの力」を働かせ、課題解決に向けて主体的に学習を進められる国語科授業

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

研究推進委員会では、中教研のめざす「深い学び」の姿を「個別最適な学び」の実現と捉え、「個別最適な学び」を実現するために、「学習ログ」の在り方が重要だと考えた。

GIGAスクール構想に基づく一人一台タブレット端末の導入によって、これまで、主として用いていたノートや学習プリント等から、「学習ログ」はデジタルテキストをはじめ、画像、動画、音声等、多様な方法で蓄積することが容易になった。今後は、「学習ログ」はより多様になり、その量も増えていくことが予想される。

そこで、日々の授業において、「学習ログ」の意図的な記録・活用・蓄積の方法を工夫することによって、主体的・協働的に学びの自覚を促し、「個別最適な学び」の実現を図りたい。学習者自身がそれまでの「学習ログ」を再構築することや生徒間で互いの「学習ログ」を交流することも、効果的だと考える。また、到達目標や評価基準を教師及び生徒集団で共有することによって、学習の自己調整を促したり、学習評価の妥当性を高めたりすることもできるのではないかと考えている。

生徒が「個別最適な学び」を実現するためには、生徒が自ら選んだり決めたりして、自らの学習を調整する場面が欠かせない。生徒が主体的に学習に向かえる単元デザインを工夫し、「深い学び」にいたる授業をめざしたいと考え、上記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

○学びの自覚を促す「学習ログ」（「深い学びの技法」のNo. 1）

I C T機器を活用した「学習ログ」で系統的な指導の蓄積、意図的な記録・活用・蓄積の方法

○主体的・協働的な振り返りで自己調整を促す「学習ログ」（「深い学びの技法」のNo. 9）

○生徒が主体的に学習に向かえる単元デザイン（「深い学びの技法」のNo. 18）

実際の授業

0. 単元に入る前に、これまで蓄積してきた学習ログを再構築した「私の国語学習 物語編」を作成し、どのように「故郷」を読むのか、計画を立て、見通しをもつ。

1～2. 辞書等を活用しながら、本文を読み進め、気付いたことや疑問等を教科書に書き込んでいく。
学習ログで着目の仕方を振り返り、初発の感想を書く。

- 3～4. 物語の設定(時、場、人)や構成(起・承・転・結)を確認し、まとめる。全員の初発の感想を共有し、追究したい自分の問いを立てる。
- 5～6. 自分の立てた問いとその解釈を仲間に伝え、語り合いをとおして、解釈について検討し、自分の考えを広げたり、深めたりする。
- 7～8. 批評文を書き、提出する。提出した文を読み合い、学習ログを元に効果的な書き方を助言し合う。

7 研究の成果と課題

【成果】

- ・「振り返り」による自己調整や「パフォーマンス課題」として蓄積されていた様々な「学習ログ」が活用されながら課題解釈に至ることが見える授業で、学習ログの重要性と有効性が確認できた。
- ・学習内容を批評文につなげる際の支援は昨年度の課題であったが、モデル文の提示や批評文を書く際の観点を示すなど、手立てを考えることができた。
- ・生徒全員が学習ログの内容を生かして批評文を書くことができた。振り返りの蓄積と、振り返りに対する教師の形成的評価が学習支援に有効であることが確認できた。
- ・学習用語、学習リーダー、学習ログについては、1年生からの系統的な指導の蓄積が重要であることを市内の部員で共有できた。
- ・学習ログの活用状況や、それぞれの学校で効果的だった取組について市内の部員で共有できた。

【来年度以降の研修に向けて】

- ・学びの格差や浅い学びを解消するために有効な形成的評価の返し方や、学習ログの共有の仕方について、今後も研修を進めていきたい。

8 運営の成果と課題

【成果】

- ・研究推進委員による意見交換から、目指す生徒の姿や実現するための手立て、単元構想などを建設的に検討することができた。また、研究推進委員一人一人が学習ログを活用した研究実践を行い、研修を深めることができた。
- ・市内の国語部員の協力を得て、学習ログを活用した取組を各校で大判用紙1枚にまとめてもらい、研究会当日に掲示した。各校の取組を共有することができ、市内全体で学びを深められる研修となった。また、研究会終了後、掲示物は新発田市教育委員会の庁舎に掲示してもらい、学習ログを活用した取組の効果について、さらに周知することができた。
- ・1年次の反省を生かし研究推進委員内で仕事の分担を行ったことで、負担を分散することができた。
- ・1年次に本発表を見据えた提案授業を行ったことによって、学習ログについて市内の国語部員が共通理解を図った上で、2年次の研究に進むことができた。また、本発表を見据えた役割分担やスケジュール、当日の運営の改善点などを確認したことによって、2年次の活動をスムーズに進めることができた。

【課題】

- ・当日の役割分担について、研究推進委員以外の先生に協力をお願いする場面があった。動員していただく先生には早めに依頼できると良い。

資 料

1 部会名 _____ 国 語 _____

2 郡市名 _____ 新発田市 _____ 3 会場校 _____ 新発田市立加治川学校 _____

4 研究会開催期日 令和 6 年 1 1 月 2 7 日 (水) _____

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	胎内市立中条中学校・校長	森谷 優子
(2) 研究推進責任者	新発田市立東中学校・教諭	五十嵐 美波
(3) 会場校責任者	新発田市立加治川中学校・教頭	廣澤 正文
(4) 県・郡市指導主事	下越教育事務所・学校支援 2 課長	白澤 道夫
(4) 研究推進委員 (授業者)	新発田市立加治川中学校・教諭	須藤 里香
(5) 顧問 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員 郡市外研究推進委員	新発田市立佐々木中学校・校長	田原 成久
	新発田市立第一中学校・教諭	本田 奈美子
	新発田市立猿橋中学校・教諭	佐久間 朋子
	新発田市立紫雲寺中学校・教諭	島津 一美
	新発田市立加治川中学校・教諭	北上 光
	聖籠町立聖籠中学校・教諭	堀田 和恵

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 12 日 / 加治川中学校	9	前年度の成果と課題を共有。今後の活動の流れと見通しを検討。
2	7 月 26 日 / 加治川中学校	9	単元構想案及び指導案の検討。情報誌 class 原稿確認。
3	8 月 7 日 / 加治川中学校	9	各校の研究成果の共有方法について検討。プレ授業の準備。
4	10 月 29 日 / 第一中学校	18	2 年次プレ授業 授業者 新発田市立第一中学校 本田 奈美子
5	11 月 27 日 / 加治川中学校	70	2 年次研究発表会 協議会 (64 名) ご指導
6	12 月 6 日 / 加治川中学校	9	研究の成果と課題のまとめ。

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数	(7 0) 名	(3) 小学校・高等学校教員	(1) 名
(1) 郡市内中学校会員	(4 2) 名	(4) 教育委員会・センター	(4) 名
(2) 他郡市中学校会員	(2 3) 名	(5) その他 (地域・保護者の方)	(0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3 年 2 組	「故郷」	須藤里香			

9 全体協議会

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第 1 分科会	これまで身に付けてきた読みの力を働かせ、課題解決に向けて主体的に学習を進められる国語科授業	胎内市立中条中学校 校長 森谷 優子 様	新発田市立紫雲寺中学校 島津 一美 教諭	新発田市立 加治川中学校 教諭 須藤 里香

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 鬼木 彩織
(学校名: 上越市立直江津中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数 学
- 2 郡市名 上 越 3 会場校 上越市立城北中学校
- 4 研究主題

深い学びに向けた数学的活動の工夫
～批判的思考の育成を目指して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 主題設定の理由

数学の授業において、数式を計算したり、データを表やグラフに表したりすることがゴールになりがちである。しかし、生徒にとってそれでは数学を学ぶ意義や楽しさといったものを感じさせることはできないと考える。数学的な操作や処理だけで終わらせないために、本研究では、数学を日常の事象や社会の事象と結び付け、考察したり解決したりする力を伸ばしたいと考えた。そこで、身近な題材を用いた数学的活動を仕組むことで、生徒が主体的に取り組み、数学を生活や学習に活かそうとする態度を養うことを目指した。学習してきた言葉や数、式、図、表、グラフなどを適切に用いて表現したり、思考の過程や判断の根拠を伝え合い共有したりする活動を通して、数学を利用することの意義や数学のよさに気付かせたいという思いから、上記の研究主題を設定した。

(2) 目指す深い学びの姿

「データの分布」の単元の中でも、得られたデータを批判的に考察し判断する場面に重点をおいた。批判的思考の育成に焦点を当てた理由は、生徒がこれまでに学んだ知識や身につけた技能を活かすことで、証拠に基づく論理的で偏りのない思考の場となることを目指したためである。自分の意見をもつことができても、その意見に根拠までは伴っていない生徒が多い。そこで、資料やデータを分析し、その傾向を読み取る活動を通して、数学を利用することの有用性を感じながら、根拠のある自分の考えをもてるようにする。そして、他者にその考えを発表したり、説明したりするなかで、多様な考えを認め合いながら、課題をよりよく解決しようとする姿を目指した。また、他者の説明に対して安易に納得するのではなく、批判的に思考したり、検討したりすることで、数学的な思考力・判断力を高めていく。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

- (1) 委員全員で、私たちが目指す学習指導の方向性について共有を図り、研究主題を定めた。委員がこれまでに感じている課題や会場校の研究主題などを考慮し、議論を深めた。
- (2) 単元の目標や内容を踏まえて、副題に「批判的思考の育成」を掲げ、そこから目指す深い学びの姿を具体化した。指導のポイントをおさえるため、深い学びの技法から次の3つを挙げた。

- 思考 資料やデータに基づいて考察したり、検証したりする。
- 解決 学んだ知識や技能を活用して思考したり、表現したりする。
- 評価 提示された資料や説明などを批判的に吟味検討する。

「思考」については、証拠に基づく論理的で偏りのない思考ができるように生徒が資料やデータを有効に活用できるようにしたいということから選択した。「解決」では、生徒が数学を学ぶ意義を感じたり、学びを活かすことでさらに深い理解が得られたりすることができるようにということを選択した。

- (3) 城北中学校での授業公開に向けて、情報誌 CLASS の原稿作成と指導案の検討を行った。
- (4) 他校でプレ授業を行い、本時に至るまでの単元の指導計画を練り直した。
- (5) 公開授業及び協議会を実施した。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・深い学びの技法が提示されたことで、具体的な手立てを考え、委員で共有する際に役立った。3つの技法について委員が常に意識して研究することで具体的な手立てがより良いものに向上させることができた。
- ・生徒の主体的な学びを生むために、生徒の身近なものを課題に設定した。日常生活での事象を数学化していくことで、学習内容の必要性を見いだせた。
- ・生徒自身が収集したデータを用いて箱ひげ図やプレゼンを作成したことで、データを深く分析し、より分かりやすく説明しようという意識につながっていた。「四分位数」や「最大値、最小値」、「○%以上が□m以上」など、数学用語を用いて表現したり、意見を共有したりすることができていた。
- ・批判的思考を働かせるために、個人→グループ→個人と授業形態を切り替えた。他者の考えを聞き、さらに自分の考えを見つめ直す時間を確保したことで、再度考えを吟味することが可能となり、より自分の考えを深めることができた。

(2) 課題

- ・生徒の主体的な学びを生むために、生徒の身近なものを課題に設定し、データの収集についても生徒自身に行わせた。また、批判的思考を働かせるために、思考の場面を多く設定した。これにより、授業の時間が標準よりも大幅に増えてしまった。データの収集についてはもっと簡易的に行える内容を検討したり、図の作成には表計算ソフトを使用したりして時間を短縮することが望まれる。
- ・班で収集したデータから箱ひげ図を作成し、作った紙飛行機のよさを他の班へアピールするプレゼンを考えた。この方法では比較するものがないため、箱ひげ図から自分たちの班の紙飛行機の特徴をつかむことは困難であった。基準となる数値を与えることや、教師の助言も必要であったという意見をいただいた。

8 運営の成果と課題

- ・1年目と2年目で推進委員が大幅に入れ替わり、研究主題の変更や授業案の検討に多くの時間を費やした。結果、推進委員会の実施回数を増やさざるを得なかった。2年間の見通しをもって研究を進めることが必要であると感じた。
- ・公開授業の前例が少ない単元であったため、事前に他校でのプレ授業を行った。委員全員で参観し、協議することで、課題が見つかり指導案検討に活かすことができた。1年目にこの流れを作ることができれば、さらに研究を深めることができたと考えられる。
- ・市教研と兼ねての開催であったため、多くの参加者を得ることができたが、その分会場校の負担が大きくなった。案内送付や準備等、委員での役割分担が適切であったのかについて振り返る必要がある。

資 料

1 部会名 数 学

2 郡市名 上越市

3 会場校 上越市立城北中学校

4 研究会開催期日 令和 6 年 1 1 月 1 2 日 (火)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越市立吉川中学校・校長	櫻井 直人
(2) 研究推進責任者	上越市立直江津中学校・教諭	鬼木 彩織
(3) 会場校責任者	上越市立城北中学校・教諭	大森 山
(4) 県・郡市指導主事	上越教育事務所・指導主事	松浦 康平
(5) 研究推進委員 (授業者) 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員 (協力者)	上越市立城北中学校・教諭	北 健太郎
	上越市立城東中学校・教諭	吉越 祐二
	上越市立頸城中学校・教諭	内田 彰尚
	妙高市立妙高高原中学校・教諭	佐藤 行夫
	上越市教育委員会・指導主事	萱森 孝宏

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/6(木)城北中	7	概要確認・研究計画作成・研究主題検討
2	6/27(木)城北中	7	研究主題決定・指導案作成・CLASS 原稿作成
3	7/11(木)城北中	9	指導案検討・CLASS 原稿確認
4	9/26(木)頸城中	9	内田教諭「箱ひげ図」プレ授業・授業協議・指導案検討
5	10/9(水)城東中	8	吉越教諭「1 次方程式の利用」授業公開・授業協議・指導案検討
6	10/31(木)城北中	8	指導案決定・要項確認・研究会当日の運営確認
7	11/12(火)城北中	9	会場準備・研究授業・協議会

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (4 8) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (2) 名
(1) 郡市内中学校会員 (4 0) 名	(4) 教育委員会・センター (3) 名
(2) 他郡市中学校会員 (3) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2 年 1 組	データの分布	北 健太郎			

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第 1 分科会	深い学びに向けた 数学的活動の工夫	上越教育事務所 指導主事 松浦 康平 様	上越市立直江津中学校 鬼木 彩織	当校教諭 北 健太郎

令和 6 年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 星野 志保
(学校名: 長岡市立宮内中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数学・中越
- 2 郡市名 長岡市・三島郡 3 会場校 長岡市立刈谷田中学校
- 4 研究主題

深い学びを実現する指導の工夫
～数学的な見方・考え方を働かせる学習過程を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領では、中学校数学科の目標において、「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力の育成を目指す」とある。

育成を目指す資質・能力の三つの柱を明確化したことにより、「数学的な見方・考え方」は、数学の学習において、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考をしていくのかという、物事の特徴や本質を捉える視点や、思考の進め方や方向性を意味することとなった。すなわち、「数学的な見方・考え方」は、数学的に考える資質・能力を支え、方向付けるものであり、数学の学習が創造的に行われるために欠かせないものである。また、生徒一人一人が目的意識をもって問題解決に取り組む際に積極的に働かせていくものである。

これらのことから、「深い学び」を実現するためには、「数学的な見方・考え方」を働かせる学習過程を工夫することが必要であると考え、長岡市三島郡では数年来研究を進めている。様々な手段を用い、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する「深い学び」の実現に向けた授業の在り方について、さらに研究を進めていく。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

令和 5 年度～6 年度の研究では、図形分野において研究を進めてきた。

1 年次には、図形指導における課題から、次のような研究テーマを決定して、授業実践を行った

- ①どのように課題意識をもたせるか
- ②課題追究に向けて、どのように見通しをもたせるか
- ③単元を貫くテーマ設定（例 条件変更など）

1 年次の授業研究から出てきた成果と課題をもとに、研究推進委員会で今年度の授業研究でのポイントを以下の 3 つとし、具体的な手立てを構想し、授業実践を行った。

①証明の必要性を感じられるような課題設定

⇒図形の性質が常に成り立つためには、具体的な数値ではなく、一般化して考えることが必要である。そのために、単元を通して、演繹的な推論のよさを想起させたり、命題の逆が常に成り立つとは限らないことを確認させたりしながら、学習を進めてきた。本時では、図に平行線をひく条件を見出したうえで、「この条件は本当に正しいのか」という揺さぶりをかけることで命題の逆について証明する必要性を感じさせることを目指した。

②結論を導く見通しを立てるために、既存の知識が使えることを確認

⇒1年次は指導の流れに沿うことで、課題追究の手順が見出せる生徒が多くみられた反面、新たな課題を提示すると「課題に立ち向かう道具（知識）をどのように使うか」の見通しをもてない状況であったという課題が明確になった。本時では、結論を導くための見通しを立てる場面で、生徒自身が情報を整理できるように、これまで蓄積してきた知識などを命題の形でカード化したものを用意した。

③論理的な証明にするために、既知の定義や定理を根拠にした説明の意識づけ

⇒「証明の書き方」に目が行きがちであるが、正しい証明を形式的に完成させるのではなく、個々の実態に合わせて、自らが整理した情報を、論理的につなげて証明の流れをつくることを意識させた。

7 研究の成果と課題

＜成果＞

○単元の導入や活用の場面でなく、日常でも使える定理の証明の場面を授業公開することで、他の課題でも使える「普段の授業をよりよく」する実践となった。授業後のアンケートでも「とても参考になった」という意見が多くを占め、2年間継続した指導の集大成として、単元に対する提案性をもった意味のある研究となった。

○既存の知識を確認するカードを作成したことで、形式的な証明の書き方とは異なり、結論を導くための指導の流れを生徒が意識するようになり、深い学びの姿に近づくことができた。

○指導案検討の際にも、常に系統的なつながりを考えて、意見交換ができ、研究推進委員自身も日頃の指導から改めて意識することにつながった。

＜課題＞

△授業の導入場面で教科書の図を使わなかった意図を十分に伝えられずに、進んでしまった。

△生徒の反応に合わせるために、細かい発問内容まで準備せずに対応したので、主発問となる部分のニュアンスが曖昧になり、一部の生徒の活動が停滞してしまった。

△知識のつながりを丁寧に扱った分、すでに証明した定理を次の課題に使える根拠としてとらえられず、再び最初から証明を考えようとしている様子が見られた。今後は授業のまとめ方を検討する必要がある。

8 運営の成果と課題

＜成果＞

○会場校の先生方に御協力いただいたおかげで研究会当日の受付から授業、協議会までの流れが非常にスムーズであった。

○研究推進委員会の開催日程を年度当初にすべて決定せず、調整しながら開催したことで、多くの推進委員の先生が直接集合して意見交換ができ、充実した指導案検討が行われた。

＜課題＞

△研究推進委員会の開催日程を調整し、直前に決定することが多く、各校への連絡が遅くなることが多く、迷惑をかけた。

△会場校責任者への連絡が遅くなり、研究会直前に様々な準備をお願いすることになってしまった。

△研究会前にプレ授業を数多くこなすことができなかった。

△研究会全体の日程（全体会・授業公開・協議会・御指導）について、会場校に負担をかけず、参加者にとって充実した研修となる時間設定を検討する時間が十分に取れなかった。

1 部会名 数学（中越）

2 郡市名 長岡市・三島郡 3 会場校 長岡市立刈谷田中学校

4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 13 日（水）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学教職大学院 ・ 准教授	阿部 好貴
(2) 研究推進責任者	長岡市立宮内中学校 ・ 教諭	星野 志保
(3) 会場校責任者	長岡市立刈谷田中学校 ・ 教頭	元川 勝宏
(4) 研究推進委員（授業者）	長岡市立刈谷田中学校 ・ 教諭	岩崎真理子
	長岡市立秋葉中学校 ・ 校長	種村 博行
	長岡市立関原中学校 ・ 教諭	丸山 香織
	長岡市立中之島中学校 ・ 教諭	平澤 寛子
	長岡市立栖吉中学校 ・ 教諭	宮田 雄介
	長岡市立与板中学校 ・ 教諭	渡邊健太郎
	長岡市立越路中学校 ・ 教諭	木村 太郎

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/11 刈谷田中学校	8	今年度の研究の方向性確認（前年度の成果と課題をもとに） 全県部会の内容伝達 授業構想（単元等の決定）
2	7/23 宮内中学校	7	指導案検討 授業情報誌「Class」原稿内容確認
3	8/27 宮内中学校	8	指導案検討
4	9/25 宮内中学校	8	指導案検討 2次案内確認
5	10/31 与板中学校	7	プレ授業（与板中学校 渡邊教諭「図形の相似」） 具体的な手立ての検討 協議会の進め方について（協議題検討）
6	11/13 刈谷田中学校	9	研究発表会、協議会
7	12/2 宮内中学校	6	研究・運営の振り返り（今年度の成果と課題）

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 4 6 ） 名	(3) 小学校・高等学校教員 （ ） 名
(1) 郡市内中学校会員 （ 3 0 ） 名	(4) 教育委員会・センター （ ） 名
(2) 他郡市中学校会員 （ 1 5 ） 名	(5) その他（地域・保護者の方） （ 1 ） 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3 年 1 組	相似な図形	岩崎真理子

9 全体協議会

協議題	指導者	司会者	提案者
① 演繹的推論の良さを想起させたり、命題の逆が成り立つとは限らないことを確認したりすることで必要感をもって証明する活動に取り組めたか。 ② 既有知識の確認や考え方の蓄積を視覚化することは結論を導くための見通しを立てることに有効であったか。	新潟大学教職大学院 准教授 阿部 好貴 様	長岡市立栖吉中学校 宮田 雄介 教諭	長岡市立宮内中学校 星野 志保 教諭

令和 5・6 年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2 年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 関谷 卓也

(学校名： 新潟市立上山中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 数 学

2 郡市名 新潟市

3 会場校 新潟市立内野中学校

4 研究主題

数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業
「課題設定」「見通し」「まとめ」に注目した授業改善

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

数学科における「深い学び」とは『数学的な見方・考え方を働かせ、数学的に考える資質・能力を育成する学び』である。そして、生徒の数学的な見方・考え方を働かせるには数学的活動が欠かせない。

前時研究では見通し・対話・振り返りに注目し授業研究を行ってきた。このことは、「問題を自立的、協働的に解決する過程」に焦点を当てていたと言えよう。今年度は、事象を数理的に捉え、数学の問題を見いだす過程や、概念を形成したり体系化したりする場面にも焦点を当てることを目指し、主題を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

1 年目に上述の研究主題を設定した。そして、研究推進委員会で「数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業」を目指したプレ授業を 3 本行い、以下の 3 つを手立てとして整理していった。

＜課題設定＞ 「深い学びの技法」の No. ①	予想とのズレ、既習とのズレを発展させ、「どのように」「なぜ」から始まる課題を生徒から引き出す。
＜見通し＞ 「深い学びの技法」の No. ⑨	既習を振り返ることを通して、生徒が働かせる数学的な見方・考え方を、方法の見通しとしてもたせる。
＜まとめ＞	「どのように」「なぜ」から始まる課題に立ち返るように促し、生徒から学習内容（資質・能力）を引き出す。

2 年目は、1 年目に作成した指導案を、内野中学校の授業者が生徒の実態などに応じて修正し、授業公開を行った。

7 研究の成果と課題

(1) 研究の実際 1 1 月 7 日（木）内野中学校での研究発表会について

学年	単元・主題	授業者	指導者
1 学年	変化と対応 ～反比例 導入～	渡辺 大樹 教諭	岡方中学校 校長 小泉 浩彰
2 学年	図形の調べ方 ～多角形の外角の和～	古川 智子 教諭	鳥屋野中学校 校長 皆川 宏志
3 学年	関数 $y = ax^2$ ～制動距離～	工藤 貴史 教諭	総合教育センター 指導主事 熊谷 友良

紙幅の都合上、ここでは 1 年生の授業について記載する。

導入では、視力検査のランドルト環を提示した。そして、生徒とのやり取りを通して「視力 2.0 の

ランドルト環の直径は何cm?」という問題を設定した。また、課題設定の場面では、既習の比例の特徴をそのまま適応させた誤答を用いて、「視力と直径にはどんな関係があるのだろうか?」という課題を生徒と共に設定した。

解決の場面では、比例の学習を想起させることで、変化（横の見方）、対応（縦の見方）を解決の見通しとして、関係の分析を促した。

そして、まとめの場面では、課題に立ち返ることで、横の見方・縦の見方のそれぞれから生徒がまとめを記述することができた。

協議会では、3つの手立ての視点から、授業のよさや改善策について交流を行った。また、問題と課題の違いや、まとめでは、どの程度一般化をするべきか等について議論が行われた。

協議会指導者からは、小学校と中学校の関数の見方の違いを整理していただいた上で、誤答を生かすことの大切さや、掲示物などによる支援について価値付けていただいた。

全体指導では、新潟市立総合教育センター指導主事 熊谷友良様より数学的活動の意義と、数学的活動を実現するには、教師が何を指導して、生徒が何を考えるかを明確にすることが大切であるとして示唆をいただいた。

(2) 当日のアンケート結果

＜本日の一斉研修はどうでしたか?＞

とても有意義だった	有意義だった	あまり有意義ではなかった	有意義ではなかった
58%	41%	1%	0%

＜自由記述 一部抜粋＞

- ・ 習得場面での数学的活動は楽しい!!と再発見しました。
- ・ 誤答の提示、これまでの学びから見通しを共有することは、すべての生徒が数学的に考え、学びを深める生徒の姿につながっていたと思います。
- ・ 協議会で、他の先生方から、多角形の外角の和の授業の流れを教えていただき勉強になりました。
- ・ 普段の授業から少しずつ積み上げていこうと思いました。
- ・ 今後、気軽に参加できる数学部の勉強会が定期的に行われるといいなと思っています。

(3) 成果と課題について

本研究の目的は、3つの公開授業を成功させることではない。参会者の日々の数学の授業を研究主題である「数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業」に近づけることである。

上述のようにアンケートには、課題設定や見通しなどの手立てについて、単元計画について、数学的活動の日常化についての記述が見られた。さらには、研修に参加したいという記述があった。

経験年数などにより、参会者の学びもそれぞれだったことは推察されるが、肯定的評価が大多数であり、日ごろの授業を「数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業」に近づけるきっかけを提供できたと考える。

8 運営の成果と課題

1年目に指導案を概ね完成することができたので、2年目は運営面の計画を丁寧に行うことができた。さらに会場校の先生方の細やかなご支援があり、滞りなく研究会を運営することができた。

参集での授業参観・協議は今後も継続していきたい。一方で参集の場合、駐車場が大きな課題になる。オンラインを活用することも視野に入れていきたい。

また、1年目の秋は、プレ授業を3本行ったので、出張が多くなってしまった。次年度以降、改善策を探っていきたい。

- 1 部会名 新 潟
- 2 郡市名 新 潟 3 会場校 新潟市立内野中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 7 日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立亀田西中学校	東 淳也
(2) 研究推進責任者	新潟市立上山中学校	関谷 卓也
(3) 会場校責任者	新潟市立内野中学校	野邊 勝一郎
(4) 県・郡市指導主事	新潟市総合教育センター	熊谷 友良
(4) 研究推進委員（授業者）	新潟市立内野中学校	斎藤 麻子
	新潟市立小須戸中学校	土田 健太郎
	新潟市立白根第一中学校	細川 伸子
	新潟市立新潟柳都中学校	長部 賢
	新潟市立南浜中学校	石田 勇弥
	新潟市立木戸中学校	宮井 誠

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7/4 内野中	9	研究会の大綱 授業者とプレ授業担当者の打ち合わせ
2	7/30 内野中	5	運営計画の検討 協議会の進め方の検討
3	9/19 内野中	8	運営計画の審議 案内・指導案の点検
4	2/20 上山中	7	R 5・6 年度の反省

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 1 6 3 ） 名	(3) 小学校・高等学校教員 （ 0 ） 名
(1) 郡市内中学校会員 （ 1 5 4 ） 名	(4) 教育委員会・センター （ 1 ） 名
(2) 他郡市中学校会員 （ 7 ） 名	(5) その他（地域・保護者の方） （ 1 ） 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
1 年 3 組	変化と対応 ～反比例 導入～	渡辺 大樹 教諭
2 年 7 組	図形の調べ方 ～多角形の外角の和～	古川 智子 教諭
3 年 2 組	関数 $y = ax^2$ ～制動距離～	工藤 貴史 教諭

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第 1 分科会	課題設定・見直し・まとめについて	岡万中学校 小泉 浩彰 校長	南浜中学校 石田 勇弥 教諭	上山中学校 関谷 卓也
第 2 分科会		鳥屋野中学校 皆川 宏志 校長	白根第一中学校 細川 伸子 教諭	新潟柳都中 長部 賢
第 3 分科会		総合教育センター 熊谷 友良 指導主事	小須戸中学校 土田 健太郎 教諭	内野中学校 斎藤 麻子

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

 報告者氏名 大竹 大智
 （学校名： 阿賀町立阿賀津川中学校 ）

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 数学部
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立五泉北中学校
- 4 研究主題

数学的な見方・考え方を働かせながら、課題解決を図る生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

○研究主題の設定

五泉市・東蒲原郡の生徒の実態として、数学に苦手意識をもっている生徒や、数学は何のためにあるか実感できていない生徒が少なからずいる。また、新学習指導要領では、「数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して、生活や学習に果たす数学の役割に気付くことができるようにし、数学を積極的に活用しようとする態度を養うことが大切である」とあり、「数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動」を通して、「数学のよさ」や「数学の有用性」を生徒に実感させることが必要だと捉えた。そこで、研究主題を「数学的な見方・考え方を働かせながら、課題解決を図る生徒の育成」とした。

○目指す深い学びの姿

この研究主題に沿った、目指す深い学びの姿を図1の「算数・数学の学習過程のイメージ」をもとに考える。「数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動」や「数学のよさ」、「数学の有用性」を生徒により強く実感させるには、日常生活や社会の事象で起こる課題を数学的に表現した問題として捉え、解決する活動が必要である。課題解決する場面においては、身に付けた知識や技能を活用したり、他者と力を合わせたりして、よりよいものを練り上げる。また、練り上げたものを共有することで、新たな気づきや数学のよさを実感し意味づけされ、学びが深まると考えた。そこで、目指す深い学びの姿を「生徒が、身の回りの中的事象を数学的に捉え、既習事項を用いたり、他と協働したりすることを通して、理由や根拠を示して論理的に説明することができる姿」とした。

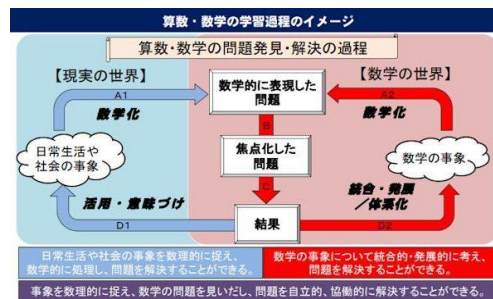


図 1

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

今年度は第3学年「相似な図形（相似と計量）」を扱い、授業のねらいとして「ピザの値段について考える活動を通して、ピザの大きさと値段には相似の関係があることに気づき、相似な図形の性質『面積比は相似比の2乗であること』を利用することによって値段を求めることができることを理解し、数学的根拠に基づいて新商品の提案をすることができる」とした。この授業を通して、「相似は生活や社会の役に立っていることに気付く、既習事項を用いたり、他と協働したりすることを通して、根拠などを示して新たな大きさ・価格を提案することができる姿」を目指す生徒の姿とした。

目指す深い学びの姿を実現するために、次の2つの課題を想定し、以下の手立てを考えた。

課題①

Lサイズのピザの値段はいくらになるか予想しよう。

課題②

あなたは、ピザ店の企画担当で新たな企画を立ち上げることになりました。直径 30cm で 2500 円であることを利用して、新たな大きさ・価格設定を提案してください。

・手立て①：課題設定の工夫

ピザを円と捉えることで、日常生活の問題を数学の世界に落とし込み、ピザの大きさと値段は相似の関係であることに気付かせる。また、課題②では、生徒がピザの大きさや値段を数学的根拠に基づきながら自由に設定し、自分ごととして課題解決する。

・手立て②：既習事項を用いた課題解決

課題①の場面では、相似比の考えを利用して課題解決する生徒がいることが予想される。相似な図形の性質「面積比は相似比の2乗であること」に気付かせるために、電子黒板で全体共有させ、複数の考えとの比較から正しい結論を導く。また、実際に重ねることで2倍より大きいと視覚的に示せるような教具を準備する。

・手立て③：授業形態（環境）の工夫

授業の開始から少人数班を形成し、いつでも仲間と質問や説明などできる環境をつくる。ただ、班を形成したからといって、常に対話せよということではなく、生徒自身が好きなタイミングで対話してもよいこととする。また、単元を通して学んだ知識や技能を蓄積し、いつでも確認できるようにする。

7 研究の成果と課題

・手立て①

ピザという中学生が興味をもちやすい日常場面を数学の世界に落とし込むことで、生徒が主体性に取り組み姿が見られた。特に、課題②の場面では自分が設定した課題をどのようにして解けばよいか、既習事項を確認したり他者と協力したりして、課題設定の重要性が改めて実感できた。

・手立て②

課題①の場面で生徒が感じる既習事項とのズレが「四角形⇔円」のズレなのか「相似比⇔面積比」のズレなのかをより明確にする必要があった。教師は生徒に身に付けてほしい力から見通しをもって、生徒の様子を観察し、ズレの焦点を合わせると課題①での目的がより達成できたと考ええる。

・手立て③

単元を通して最初から班を形成させたことで気軽に質問しあえる雰囲気ができ、何かしらの形で課題に取り組もうという姿が見られた。一方で、単に答え合わせだけの関係になる場面も見られた。いつでも仲間と対話できる環境について、更なる検証、研究が必要だと感じた。

8 運営の成果と課題

今年度は指定研の発表前に2回プレ授業を指定校とは別の学校で行った。プレ授業を行ったことでより有効な指示や支援の出し方を研究することができた。また、プレ授業にも指導者に来ていただいたり、他教科かの先生からも見ていただいたり、活発な意見交流があり、より良い協議会になった。

研究の流れから実施時期が10～11月頃で集中しがちであり、研究会への参加人数にも影響を与えかねない。また、この時期であれば内容が数学だと図形の分野に偏りがちである。時期や単元が集中しない工夫が今後必要である。

- 1 部会名 数学部
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 五泉市立五泉北中学校
- 4 研究会開催期日 令和6年11月26日（火）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新発田市立東中学校・校長	五十嵐 潤
(2) 研究推進責任者	阿賀町立阿賀津川中学校・教諭	大竹 大智
(3) 会場校責任者	五泉市立五泉北中学校・教頭	金泉 圭
(4) 郡市中教研顧問	五泉市立川東中学校・校長	佐藤 昌樹
(5) 研究推進委員（授業者）	五泉市立五泉北中学校・教諭	知野 憲太
	五泉市立川東中学校・校長	佐藤 昌樹
	五泉市立川東中学校・教頭	鈴木 隆士
	五泉市立川東中学校・教諭	西山 浩太郎
	五泉市立五泉中学校・教諭	二宮 知美
	五泉市立村松桜中学校・教諭	伊藤 成彦
	阿賀町立三川中学校・教諭	長谷川 一憲

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月26日／川東中	7	今年度の主題や研究の進め方について
2	7月26日／川東中	7	授業構想の検討
3	8月20日／川東中	6	指導案検討 中心課題やワークシート等の検討
4	9月30日／阿賀津川中	9	研究推進委員によるプレ授業「相似な図形」 プレ授業を受けての指導案検討
5	10月28日／三川中	8	研究推進委員によるプレ授業「相似な図形」 当日の役割の確認
6	11月26日／五泉北中	10	下越地区数学研究発表会
7	12月4日／川東中	9	今年度の活動の振り返り

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （34）名	(3) 小学校・高等学校教員 （1）名
(1) 郡市内中学校会員 （20）名	(4) 教育委員会・センター （1）名
(2) 他郡市中学校会員 （12）名	(5) その他（地域・保護者の方） （0）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年2組	相似な図形	知野憲太

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	手立てはねらいに迫る手段として有効だったか	新発田市立東小学校 校長 五十嵐 潤 様	五泉市立村松桜中学校 教諭 伊藤 成彦	阿賀町立阿賀津川中学校 教諭 大竹 大智

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 丸山 徹也

（学校名：妙高市立新井中学校）

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 道徳

2 郡市名 妙高市

3 会場校 妙高市立新井中学校

4 研究主題

語り合いを通して、よりよい生き方を求める生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

会場校である新井中学校生徒の、道徳の授業における実態として、「生徒の学びに個人差がある」「他者の考えをすぐに肯定し、深まりに欠ける面がある」ことが挙げられる。

以上のことから、目指す生徒の姿を

- ・主体的に取り組む（自分事としてとらえる）姿
- ・生徒と教材、生徒と授業者、生徒と生徒が多面的・多角的な視点で対話する姿
- ・自分の生き方について考えを深める姿

の3点とした。生徒が自身の体験などから自分の思いを語り、また仲間の語りを聞くことで、道徳的な価値観が強化されたり修正されたりするのではないかと考えられる。さらに、迷いや葛藤の中から自分事としてとらえることで本当の問いが生まれ、自分の生き方について「多面的・多角的」に考えることができるのではないかと考える。以上のことから、研究主題を上記の通りに設定し、研究を推進することとした。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（1）安心して語り合える場をつくるための体制づくり

新井中学校の日常的な取組として、各教科・領域での話し合い活動に加え、「ミニ班会議」や「クラス会議」を行っており、話し合い活動の土台づくりを目指している。それを道徳の授業での「語り合い」に発展させるために、①話し合いの意義 ②話し合いのルール ③話し合いの内容 ④話し合いの場について職員の共通理解を図り、「道徳の授業」における「語り合い」の留意点の作成に取り組んだ。

（2）授業づくりの工夫

①自分事として考える導入・発問・資料の工夫（深い学びの技法7）

生徒が自分事として考え、よりよい生き方を模索できるよう、生徒の生活体験等と関連付けた導入や終末を工夫した。また、生徒の思考を予想し、共感的発問、自己置換的発問や切り返しの発問を意図的に行うことで、生徒に新たな気づきや自分事として考えさせ、問題意識を喚起することができる。これにより、根拠をもとに交流することで、多面的・多角的な思考を促し、深い学びにつなげていく。

【共感的発問の例】

「～はどんなことを考えていたか」

【自己置換的発問の例】

「自分が～だったらどう考えるか」

【切り返しの発問の例】

「もう少し教えてください」

「補足してくれる人はいませんか」

②「語り合う」ためのツールの活用（深い学びの技法8）

深い学びに至るための語り合いになるよう、発問の工夫や手立て、授業者のスキルや生徒の話し合いのスキルを明確化し、話し合いのためのツール（ホワイトボードやICTなど）を活用する。

協働的に書く場面を設定することで多様な考えを交流することができる。例えば、充実した語り合いにするためにホワイトボードや情報共有アプリを使用し、それぞれの考えを可視化し、「多面的・多角的」に捉えさせる。授業者がそれらについて、「どういいますか」「もう少し話し合ってください」と問い返すことで、さらに議論が深まり、語り合いにつながる。

③振り返りの充実（深い学びの技法 19）

語り合いを通して、生徒が何を学び、どんな気づきがあったのか、どのように考えを深める事ができたのかなど、自分の思考と向き合うための「振り返り」の時間を十分に確保する。語り合いで、表出できなかった思いや新たな気づきも含め、教材に向き合わせる。このような自己内対話が、学びを深め、新たな見方、考え方への気づきを促し、道徳的实践力を高める契機となることを期待している。

以上を踏まえて、授業づくり・授業の基本型を以下のように設定した。

- ・学習指導要領の内容項目を読み、指導のポイントやねらいを確認する。
- ・中心発問の吟味→補助発問の順で発問を考える。
- ・導入部で生活体験を聞いたり、補助資料を活用したりして「自分事」としてとらえられる工夫をする。
- ・中心発問等では、語り合う場面を設定する。（教材による）
- ・振り返りの時間を確実に設ける。

（3）指導体制の充実

新井中学校では、今年度ローテーション道徳に取り組んでいる。授業者のメリットとしては、授業者相互の学び合いで授業力の向上を図ることができること、一つ一つの教材研究と準備にじっくりと取り組むことができ授業者のスキル向上につながる事が挙げられる。また、生徒側のメリットとしては、学級担任以外の職員の指導により様々な価値観に触れ、他教科とも関連付けて考えることができ、より「深い学びの姿」につながる事ができるのではないかと考えられる。

7 研究の成果と課題

- ミニ班会議やクラス会議など話し合いの活動を日常的に行い、話し合い活動の土台づくりを行った。日常の活動の積み重ねがより良い活動になることを改めて確認することができた。
- 語り合うための思考ツールの活用や発問の工夫により、自分事と捉える場面が増え、真剣に議論する姿が見られるなど生徒の変容がみられた。
- ローテーション道徳に取り組むことで、切り返しの発問の検討など教材研究を一層掘り下げることができ、職員集団の授業スキルに向上につながった。
- プレ授業実践の後、思考ツールの活用について改善がなされ、多面的、多角的な見方考え方を行う授業づくりを郡市一体となつて行うことができた。
- ▲振り返りの時間の確保や記述内容の検討など、生徒の内面を見取るための振り返りを充実させることが必要であった。

8 運営の成果と課題

- 3つの学年を公開できた。参観者へ研究主題へのアプローチを複数の視点から示すことができた。
- 発表校で作成した当日の授業案をそれぞれの研究推進委員の学校で実践することで、郡市全体で道徳の研究の推進を進めることができた。特に、授業公開を行った会場校では、職員全体で授業を作つて以降、考えていこうという機運が高まった。
- ▲各校の実態を踏まえた指導案検討するために早めに指導案を各校の研究推進委員に資料提供する必要があった。
- ▲研究会当日の授業の内容項目が同じとなり、学年間での調整し、多様な公開となればより充実した研究会となった。

1 部会名 道徳

2 郡市名 妙高市

3 会場校 妙高市立新井中学校

4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 22 日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越市立板倉小学校・校長	廣 井 弘 敏
	妙高市教育委員会・副参事	小 出 信 也
	上越市立八千浦中学校・教頭	平 野 彰 子
(2) 研究推進責任者	妙高市立新井中学校・主幹教諭	丸 山 徹 也
(3) 会場校責任者	妙高市立新井中学校・教頭	鴨 井 淳 一
(4) 研究推進委員（授業者）	妙高市立妙高高原中学校・教諭	上 山 晃 平
	妙高市立妙高中学校・教諭	竹内 ひなた
	妙高市立新井中学校・教諭	丸 山 信 昭
	妙高市立新井中学校・教諭	岡 田 敏 哉
	妙高市立新井中学校・教諭	堀田 加奈子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5 / 31 新井中学校	7	今年度の研究推進委員会の日程等
2	6 / 28 新井中学校	10	研究会当日・プレ授業の持ち方等
3	7 / 3 新井中学校	6	会場校の道徳の校内研修（1年授業公開）と指導案の検討
4	7 / 11 新井中学校	6	会場校での道徳の校内研修（2年授業公開）と指導案の検討
5	7 / 17 新井中学校	6	会場校の道徳の校内研修（3年授業公開）と指導案の検討
6	9 / 2 新井中学校	10	他校のプレ授業の日程。会場校の学年別道徳の指導案の検討
7	10 / 1 妙高高原中学校	6	当日の指導案を基に他中学校での授業公開と当日指導案の検討 妙高高原中学校 1学年 居ヶ内はるか教諭 「もったいない」 (研究会当日授業者1名参加)
8	10 / 11 妙高高原中学校	6	当日の指導案を基に他中学校での授業公開と当日指導案の検討 妙高高原中学校 1学年 上山晃平教諭 「もったいない」 (研究会当日授業者1名参加)
9	10 / 15 妙高中学校	15	当日の指導案を基に他中学校での授業公開と当日指導案の検討 妙高中学校 1学年 竹内ひなた教諭 「もったいない」 2学年 若山泰文教諭 「夜の果物屋」 3学年 金井周平教諭 「家族の思いと意思表示カード」 (研究会当日授業者3名参加)
10	11 / 15 新井中学校	10	研究会当日の運営面の確認。指導案・要項の最終検討
11	12 / 24 新井中学校	10	今年度のまとめ(成果と課題)

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 (6 3) 名	(3) こども園・小学校・高等学校教員 (1 0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (4 0) 名	(4) 教育委員会・センター (2) 名
(2) 他郡市中学校会員 (1 1) 名	(5) その他（地域・保護者の方） (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
1年3組	「もったいない」 (内容項目 B 思いやり、感謝)	北島 大樹	2年2組	「夜の果物屋」 (内容項目 B 思いやり、感謝)	山口 達也
3年3組	「家族の思いと意思表示カード」 (内容項目 D 生命の尊さ)	岩片 仁美			

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体会		上越市立板倉小学校 校長 廣井 弘敏 様	妙高市立新井中学校 丸山 徹也 主幹教諭	当校教諭 堀田 加奈子
第1分科会	「深い学びにいたる授業」、本校の研究主題にむけて、本時の「発問の工夫」「ICTの活用」「振り返りの確保」などの手立てが有効であったか	上越市立板倉小学校 校長 廣井 弘敏 様	妙高市立妙高中学校 竹内 ひなた教諭	
第2分科会		上越市立八千浦中学校 教頭 平野 彰子 様	妙高市立新井中学校 丸山 徹也 主幹教諭	
第3分科会		妙高市教育委員会 副参事 小出 信也 様	妙高市立妙高高原中学校 上山 晃平 教諭	

令和 6 年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2 年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 川上 綾子

（学校名： 見附市立南中学校 ）

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 道 徳

2 郡市名 見附市

3 会場校 見附市立見附中学校

4 研究主題

「多面的・多角的に自己の考えを練り上げる生徒の育成を目指して」

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

研究推進委員から、道徳の授業の悩みのひとつとして、子供たちの考えが話し合いの中で深まらず、どこか他人事の感想に終始してしまうような様子があることが挙げられた。

その理由として、

- (1) 教材が自分の経験とは遠い内容で、自分事として感じられないこと
- (2) 価値の理解が表面的で、多様な視点やその実現の難しさについて思考が及んでいないこと
- (3) 対話を深めるための手立てが不足していること

が考えられた。

そのため、内容項目と教材の研究を通して授業者の「ねらい」を明確にし、自分のこととして考えることができるような展開や、対話を通して道徳的価値への理解を深めることができるような工夫に焦点を当てて研究を進める。

道徳科での「深い学び」を、「生徒が『自分ならどうするか』という主体的な観点から道徳的価値と向き合い他者の意見に触れることや、『対話』を通して自分にとっての新たな気付きや視野の広がりを得て、『多面的・多角的』に自分自身と道徳的価値の関わりについて捉え直したり練り直したりしながら、自分はどのように在りたいかを問い続ける生徒の姿」と捉え、「対話的な学び」を大切に授業を構成する。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

(1) 研究の方法

- ①内容項目と教材の研究及び事前の生徒理解から、授業のねらいを検討する。
- ②比較や視点の転換を意図した発問や資料で、多面的・多角的な思考を促す。
- ③対話が深まるよう、ICTでの意見の可視化や問い返しを工夫する。
- ④課題となっている道徳的価値について繰り返し考えさせ、それぞれの納得解について考える振り返りの時間を確保する。

(2) 研究の内容

①本時のねらいを内容項目から検討する。

生徒にとって道徳の課題が自分事となり、これからの生き方や在り方について考える時間となるような授業をつくるためには、授業者である教師が、その教材を使って生徒たちに何を考えさせたのかという目標を明確にすることが重要であると考え、授業改善の第一歩として取り組んだ。

②比較や視点の転換を意図した発問や資料で、多面的・多角的な思考を促す。

より多面的・多角的に思考する姿を期待し、教科書教材の内容を補足する資料として、本時では映像教材を活用することとした。本時の教材文がもとも映像資料から作成されたものであるため、教科書と併用した。映像教材は、教科書では分からなかったその後の選択について、松岡さん自身の言葉でその心情に触れることができるため、テーマである道徳的価値を深く考えさせる資料と

して用いた。

ねらいと連動して、「問い」についても検討を繰り返した。指導者の早川教授や丸山指導主事をはじめ、春日哲教科専門監、上廣道徳教育アカデミーの菅原友和特任准教授をお招きし、御指導をいただいた。6月～10月まで各校で模擬授業を行い、検討を重ねて本時の指導案を作成した。

③意見の可視化の工夫

生徒一人一人が自分事として授業に参加し、自分の言葉で意見を表現する時間を作るため、ICTを活用した。意見の集約が素早くでき、議論の時間を増やせることや、可視化によって他者の意見と自分の意見の比較が容易になり、相手の考えを見ながら話せることで、話し合いがより深まると考えた。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 今年度は、市中学校教育研究会全会員を対象に、早川教授から御講演いただき、授業づくりについて御指導いただいた。
- ② 昨年度に見附市立見附中学校の早田浩延教諭が考案した学習指導要領の『解説』に基づいたねらいづくりと発問に焦点を当てた単元構想シートの活用について、研究推進委員が中心となって各校で研修を進め、会員に提案することができた。
- ③ 教科書題材の事後を取り扱った映像は、教材内容の理解を深め、テーマをより深く考えるために有効であった。導入部分では「農作物を荒らす動物は駆除すればいい」と述べたが、映像で見た苦悩する松岡さんの表情や言葉から、「安易に動物の命を奪う選択をしてはならないし、共存のためには相手のことをよく考えていかなければならない」と意見を変える生徒の様子が見られた。
- ④ 生徒は、授業中に ICT 機器を活用して、自分の考えを何度も修正しながら記述したり、他の意見を眺めながら話し合ったりした。適切な活用が授業の展開をスムーズにし、生徒の思考を深める一助となった。
- ⑤ 授業者は、入力された生徒の意見を確認しながら、適宜問い返しをした。場面に応じた問い返しで、生徒の思考を揺さぶり、深めることができた。解決の難しい課題を問うているため、生徒は進んで他の意見を求めて対話した。授業者が、日頃から生徒同士の対話が自然にできる雰囲気づくりや工夫を重ねたことも、深い学びに至る重要かつ効果的な手立てとなった。
- ⑥ 生徒は、言葉を練り直しながら振り返りを記述した。今後は生徒の感想をデジタルで記録し、評価にも活かせるようにしたいという提案があった。

(2) 課題

- ① 「単元構想シート」を汎用的に活用し、道徳の授業改善に取り組むことには至らなかった。
- ② 「ICT で入力する時間を生徒の対話にあててはどうか」、「入力された生徒の考えをお互いに読み合う時間をとってはどうか」などの御意見をいただいた。ICT の効果的な活用方法について、今後も研究を重ねる。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ① 第1回研修委員会で年間の活動計画を示したことで、計画的に研究が進められた。前日の準備やそれまでの打合せにより、2年次研究発表会の運営や授業をスムーズに終えることができた。
- ② 指導者として、上越教育大学教職大学院教授 早川裕隆様、中越教育事務所指導主事 丸山俊様に加えて、上廣道徳教育アカデミー特任准教授 菅原友和様、道徳教育専門監 春日哲様に御指導いただいた。
- ③ 市中学校研究会全会員を対象とした研修会を8月に実施し、研究に対する理解を深めた。

(2) 課題

- ① 参観者が、協議会で十分に協議する時間をとることができなかった。

資 料

- 1 部会名 道 徳
- 2 郡市名 見 附 市 3 会場校 見附市立見附中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 20 日 (水)
- 5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学教職大学院教授	早川 裕隆
(2) 研究推進責任者	見附市立南中学校	川上 綾子
(3) 会場校責任者	見附市立見附中学校	早田 浩延
(4) 県・郡市指導主事	中越教育事務所学校支援第2課指導主事	丸山 俊
(4) 研究推進委員(授業者)	見附市立見附中学校	白井 拓己
	見附市立今町中学校	木村 健彦
	見附市立西中学校	石田 貴子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
	3月5日(火)	4	教材解釈について上越教育大学教職大学院教授早川先生から御指導(zoom)
1	4月23日(火)南中	6	研究方法、研究主題の検討
2	5月14日(火)南中	6	指導案(本時の展開)についての検討
3	6月4日(火)南中	7	指導案(本時の展開)についての検討、県中教研研究誌『class』原稿完成(研究方法について)
4	7月2日(火)今町中	6	模擬授業(木村 T)、指導案(本時の展開)についての検討
	8月19日(月)	67	早川先生の講演会(北谷公民館 14:00~16:00)、指導案(仮)について御指導
5	9月10日(火)西中	7	模擬授業(石田 T)、指導案(仮)完成
6	10月11日(金)見附中	8	模擬授業(白井 T)、上廣道徳教育アカデミー菅原特任准教授からの御指導、公開授業の準備、参加者数確定
	11月5日(火)	4	発問について上越教育大学教職大学院教授早川先生から御指導(zoom)
7	11月14日(木)見附中	3	模擬授業(白井 T)、指導案完成
8	11月15日(金)見附中	4	指導案印刷等公開授業の準備
9	11月20日(水)見附中	66	2年次公開授業、協議会

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (66) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (33) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (30) 名	(5) その他(大学関係者) (2) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年3組	「サルも人も愛した写真家」(自然愛護)	見附市立見附中学校 教諭 白井 拓己

9 分科会(全体協議会)

協議題	指導者	司会者
「本時の発問や展開が、多様な考えに触れ、これまでになかった視点や視野の広がりを得るために有効だったか」	中越教育事務所学校支援第二課 指導主事 丸山 俊 様 上越教育大学教職大学院教授 早川 裕隆 様	見附市立見附中学校 教諭 早田 浩延

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 岡澤 唯子
(学校名：新潟市立亀田西中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 道徳

2 郡市名 新潟 3 会場校 新潟市立黒埼中学校

4 研究主題

豊かなかかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

道徳部では、新潟市中学校教育研究協議会の研究主題である「自分の力に自信をもち、心豊かな子供を育てる中学校教育」について、道徳教育における『自分の力に自信をもっている姿』を「道徳的諸価値についての深い理解を基に、よりよく生きるための適切な行為を主体的に選択し、実践しようとする姿」と捉え、その育成を目指していくこととしてきた。さらに、県中学校教育研究協議会が提唱する「深い学びにいたる授業」を、「他者や自己との『かかわり（対話）』を通して、道徳的諸価値についての理解を深め、道徳性を養うこと」と捉え、かかわり合いの場面を授業内に効果的に位置づけることを目指してきた。生徒が他者とのかかわりを通して道徳的価値に対する考えを深めながら、自分の行動のあり方についても考えを深めていく姿を目指して今年度の取組を進めた。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（1）方法

一年目の会場校や幹事による授業公開を受けて、二年目は会場校責任者のプレ授業や授業担当者による事前授業を行った。いずれも指導者である佐久間奈々子先生よりご指導をいただきながら内容を修正していった。

また、会場校では、学校全体で「揺さぶる発問」「話し合いの充実」「クロスカリキュラム」を道徳授業の重点手立てとし、教育目標や目指す生徒の姿とのつながりを意識した取組を継続してきた。

（2）内容

「国際理解、国際貢献」という、生徒が自分事として関わるのが難しいテーマに取り組むにあたり、課題となったのは、次の三点だった。

①二時間構成での授業展開で考えること（教材にじっくりとりくみ、振り返りの時間を確保するため）

②知識をどのように身につけさせるかということ

③道徳的価値への判断基準をもたせるにはどうするかということ

①に関しては、一時間目が最適解まで、二時間目が納得解を目指して、という流れで構成することになった。②に関しては、他教科との横断的学習を意識し、今回の単元に取り組む際に、各教科で行った関連授業を想起させながら授業に入った。③に関しては、「国際理解、国際貢献」について考える際に価値判断の拠り所となっていく差別や偏見について考えさせる「公正、公平、社会正義」に関する教材や、「日本の良さ」「日本人の良さ」などを意識させる「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」に関する教材を学習に組み込み、一年時から三年時までを単元化することで価値判断の基準を練り上げてい

くことに挑戦した。

一方で、生徒同士がかかわり合いながら深く学ぶ姿を実現するために何ができるか、という「手立て」を考えていった。

- ①ICT のチャート図やホワイトボードを使って意見を集約し、TV や黒板で可視化する方法をとった。
- ②チャート図をもとにした、出てきた意見をグループで見ながら検討できるシートを用いて、グルーピングや、他のグループの意見を取り入れていく活動を行った。同じシートに書き込み修正していくことで、意見の広がりや深まりを確認できるようにした。
- ③前の授業での気づきを確認しつつ新たに書き加えていくことができるシートを用い、振り返りまでの考えの変化を見られるようにした。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

一年時の「異文化の人々と共に生きる」の段階では、自分事としてテーマをとらえている生徒は多くない。三年生まで継続的に取り組んだことによって、実際には距離として遠い「国際理解、国際貢献」に、なるべく自分事としてかかわっていきこうという意欲や、関心が高まった様子が多く見られた。例えば「国際理解と聞いても自分には関係ないと思っていたが、自分に関係のあることだと思うようになり、自分に何ができるか考えることが大切だと思った」「今までは自己満足で済ますことがあったが、相手にとってどうなのかと考えることが国際協力だと思う」「外国人だからと偏見をもっている自分に気づかされた」などと、自分に引き付けて考えようとする姿勢が振り返りの言葉に表れている。さらに、日ごろ言語化が苦手な生徒も、インプットした情報を生かして、自分にできることを真剣に探す姿が印象的だった。

「二時間構成で納得解を目指す」「他教科との横断的学習を意識する」「単元化で深く掘り下げる」といった取組は、各校での実情は違っても、「国際理解、国際貢献」のようなテーマに取り組む際のヒントになったのではないかな。

また、分科会で評価が高かった「これまでの自分、これからの自分」という振り返りの問いかけは、テーマに関わらず取り入れられるため、各校での授業実践に活用できるのではないかな。

(2) 課題

- ①分科会で多く見られた意見に「世界の中の日本人」を自覚させる難しさというものがあつた。
- ②考えを広げる「手立て」は充実していたが、考えを深めるという点においては課題があつたとの指摘があつた。かかわりあいの中で考えを広げつつ深めていくにはどのような「手立て」が必要であるのか、これからの研究に引き継ぎたい。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・新たなテーマにチャレンジし、提案性のある内容を示すことができたこと。
- ・指導者と会場責任者、会場校との連絡、調整を滞りなく行うことができたこと。

(2) 課題

各校の道徳担当者の入れ替わりの激しさと、それによる課題共有と伝達の難しさ。研究を確実に積み上げ、会場校への適切なサポートができたかという面からみると不十分だった。今後も道徳の担当者が入れ替わる現状は変わらないと思われるので、負担が大きくなりすぎない持続可能な取り組み方をしていくことが求められる。

- 1 部会名 道徳
- 2 郡市名 新潟 3 会場校 新潟市立黒埼中学校
- 4 研究会開催期日 令和6年 11月 14日(木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	佐久間 奈々子
(2) 研究推進責任者	新潟市立亀田西中学校・教諭	岡澤 唯子
(3) 会場校責任者	新潟市立黒埼中学校・教諭	河治 正人
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立黒埼中学校・教諭	上野 由貴
	新潟市立黒埼中学校・教諭	堀口 健一

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人 数	主な内容
1	10月 3日／黒埼中学校	5	会場校責任者による3学年のプレ授業と指導案検討
2	10月28日／黒埼中学校	3	3学年の授業者による事前授業と指導案検討
3	10月30日／黒埼中学校	4	2, 3学年の授業者による事前授業と指導案検討
4	10月31日／亀田西中学校	4	研究会当日の準備, 要項の内容検討
5	11月 5日／黒埼中学校	4	3学年の授業者による事前授業と指導案検討
6	11月13日／黒埼中学校	6	研究会当日の準備, 要項の内容確認

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (98) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (96) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (1) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年3組	むこう岸には	堀口 健一			
3年3組	希望の義足	上野 由貴			

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	「本時の手立て」は成功しているか。	新潟市立高志中等教育学校 校長 灰野 仁	新潟市立亀田中学校 角木 博 教諭	堀口 健一 教諭
第2分科会	「本時の手立て」は成功しているか。	新潟市立小合中学校 校長 太田 公仁	新潟市立曽野木中学校 太田 昌彦 教諭	上野 由貴 教諭

令和 6 年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2 年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 相馬 亮

(学校名：村上市立山北中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 道徳

2 郡市名 村上・岩船

3 会場校 村上市立朝日中学校

4 研究主題

多面的・多角的な視点をもって自己の生き方を見つめ、深い学びに向かう生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、「納得解」を得るための資質・能力を育む道徳授業が求められている。これまでの道徳授業を振り返ると、「周りの意見に流されやすい。」「グループ活動はしているが学びが深まっていない。」「生徒の振り返が表面的である。」「根拠をもとにした、生徒自身の言葉による意見交換や振り返りが少ない。」などが課題として挙げられた。

そこで、本実践では、生徒が自分の考えを最初の思いつきだけにとどめるのではなく、他者との対話を通して、異なる考え方に触れることで深めさせたい。その過程において、生徒が自分の考えを質的に変容させた状態を、深い学びの姿と考える。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

そこで、県の方針を受けて、次の4点を今後の授業づくりの柱として「深い学びに向かう授業」の実現を図る。

①自分事としての課題にするための授業展開の工夫【技法③】

事象を「自分事としての課題」として捉えさせるために、題材がもつ価値や話し合いの視点を明確にする。その過程でこれまでの考えや生き方を確認させながら、自分はどのように感じたか、自分はどのように判断・行動するのかを考えさせる。

②多面的・多角的な視点からの重層的な発問【技法⑦⑧】

「多面的・多角的な視点」を事象の様々な場面や状況について、立場や意見などの複数の視点と捉え様々な角度から総合的に考察することの大切さや、多様な価値観を互いに尊重し合うことの大切さに気づかせる。

③思考を深めるための他者対話・自己対話の設定【技法⑧⑩】

多様な立場や意見に着目させるための発問を通して表出された考えを、グループ活動や学級全体での意見交流（他者対話）することで思考（自己対話）の深まりを図る。

④自らの価値観を深める振り返り【技法⑮⑯】

①～③を通じて、更なる自己対話を行いながら考えを深めて「納得解」を得ることで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

<関連する「深い学びの技法」について>

【技法③】視点・観点・論点を設定して思考や表現をする

【技法⑦】視点の転換や逆思考をして考える

【技法⑧】異なる多様な考えを比較して考える

【技法⑩】友達との練り合いや練り上げをする

【技法⑮】自分の言葉で学んだことを整理してまとめる

【技法⑲】学習成果と自己との関わりを振り返る

7 研究の成果と課題

下越教育事務所学校支援第2課 課長 白澤道夫様を指導者にお招きし、授業公開を行った。
白澤課長様からは次のようなご指導を頂いた。

①指導【核となる「生命の有限性・連続性・偶然性」の指導の視点】

「有限性」生命にはいつか終わりがあること。その消滅は不可逆的で取り返しがつかないこと

→自分にとって身近な生死との関連の中で、その重さを認識する生徒の思いを考慮し、生きていることを大切にすることの心情を引き出す。

「連続性」生命はずっとつながっているとともに関わり合っていること

→主に自分と家族や先祖との結びつきを意識させることで、過去から現在へのつながりを再認識させる。同時に、今ある生命が未来へもつながっていくことに気付かせる。

「偶然性」自分が今ここにいることの不思議

→生命が存在することの偶然性については、神秘的に感じられる面もあり、唯一無二の存在である自己そのものについて深く考えるきっかけになる可能性も考慮し、生きていることをプラス思考で捉えさせる。

②授業配列

3つの視点を手掛かりに生命の尊さを考えさせることで、自らの生命の大切さを深く自覚させるとともに、他の生命を尊重する態度を身に付けさせたい。生命あるものは互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念をもつことができる生徒の育成を目指すために年間指導計画及び計画的な単元構成配列を組んだ。

③プレ授業

郡市内の学校で、「人間に命とは」のプレ授業を実施した。指導案をもとに、授業公開当日に行う内容を各校に実施し、改善点と良かった点を報告してもらった。その報告をもとにブラッシュアップしたものとした。当日の授業の流し方、時間配分など参考になる部分が非常に多かった。

④授業公開

1年次の指導内容を踏まえ、11月に実施した授業公開では、多面的・多角的な視点をもつために登場人物の心情を把握するために心情メーターや2色に紙コップを使った。多面的・多角的に考えることにより、自分の考えをより一層深く考える姿があった。核となる部分を「生命の有限性・連続性・偶然性」と設定したことにより、生徒が自らの生命や他者の生命について真剣に考える姿が見られた。3つの視点を意識した授業配列での効果があったと考えられる。課題として、生徒の心情を2色の紙コップだけで表現するのは難しく、また心情メーターで表される生徒の微妙な心情変化を、教師側が把握しきれなかった部分があった。

8 運営の成果と課題

郡市中教研道徳部の協力により、研究方針の事前検討会や今年度の公開授業が大変充実したものとなった。特に今年度の指定研究校となった朝日中学校への実践例提供によって、多くの学びを得られた。課題としては、今年度の成果と課題を郡市内の各校と合意形成を図りながら学びを深めていき、いかに実践を継続的にしていくかが挙げられる。

- 1 部会名 道徳
- 2 郡市名 村上・岩船 3 会場校 村上市立朝日中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 15 日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	下越教育事務所学校支援第2課 課長	白澤 道夫
(2) 研究推進責任者	村上市立山北中学校・教諭	相馬 亮
(3) 会場校責任者	村上市立朝日中学校・教諭	五十嵐 雅人
(4) 県・郡市指導主事		
(4) 研究推進委員（授業者）	村上市立朝日中学校・教諭	加納 貴文
	村上市立朝日中学校・教頭	齋藤 望
	村上市立村上第一中学校・教諭	鈴木 篤史

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5月28日／朝日中	4	①研究推進委員発足 ②全県部会の内容伝達 ③研究方針について協議
2	7月5日／朝日中	5	①指導案検討会
3	8月2日／朝日中	6	①指導案検討会
4	10月8日／朝日中	5	①指導案検討会 ②指定研究会当日の役割打合せ
5	11月15日／朝日中	6	①授業公開 ②協議会
6	12月2日／朝日中	5	①2年次研究会概要報告書作成

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 3 2 ） 名	(3) 小学校・高等学校教員 （ 0 ） 名
(1) 郡市内中学校会員 （ 2 4 ） 名	(4) 教育委員会・センター （ 1 ） 名
(2) 他郡市中学校会員 （ 7 ） 名	(5) その他（地域・保護者の方） （ 0 ） 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3年2組	人間の命とは	加納貴文			

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	①生命についての問題を「自分事としての課題」にするために、授業の構成は適切だったか。 ②生命の尊さについて、多面的・多角的な視点で捉えるために、対話的活動は適切だったか。	下越教育事務所 学校支援第2課 課長 白澤 道夫 様	関川村立関川中学校 國井 郷史教諭	研究推進責任者 山北中学校 相馬 亮

令和 6 年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2 年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 阿部 昭比古
(学校名: 柏崎市立第二中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 美術

2 郡市名 柏崎市・刈羽郡 3 会場校 柏崎市立東中学校

4 研究主題

豊かな生き方を目指す美術授業

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

「美術を通して、コミュニケーションができ、豊かな生き方ができる生徒の育成」を軸とし、仲間の作品や参考作品などの様々な作品からよさや美しさを感じ取り、表現の多様性を認め合う姿と表現と鑑賞の往還を通して、考えをまとめ、自らの思いを確かにしていく姿を目指すこととした。実現を図るための有効な手立てとして、「表現と鑑賞の行き来（往還）を学びの中に設定すること」「表現に対する自信のなさを払拭するために、技術力の向上を図ること」「表現意欲を向上させ、つくる目的を明確にすること。（そのためのテーマ設定を大事にすること）」「授業の組み立て方を工夫すること。鑑賞から制作、制作から鑑賞など内容取扱いに変化をつける」「多様性や自己肯定感つながる教師の働きかけを大切にすること」「上記の実現の為に ICT を有効活用すること」の 6 つを掲げた。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

1 年次の段階で、「水墨画」を題材とした実践を進めていくことが確定していたため、第 1 回の推進委員会から具体的な話し合いが進められた。水墨画といっても多種多様な技法・表現があり、ポイントの定め方で大きく計画も変わってくる。

- ① 参考作品をもとに既存の技法を目指し、それらを応用することで自己実現を目指す。
- ② 固定概念に左右されず、ほぼゼロの状態から技法体験を行い、技法を発見し、そこから自己実現に繋げていく。

の 2 つの考え方が挙げられた。また、指導者からのアドバイスを基本に、「水墨画の世界をより深めることは人間的により深めていくこと」であることが確認された。

第 2 回では、授業者の意向により、「『偶然』をキーワードに自分を見つけていく授業」を目指していくことが確認された。その実現のために、「墨に慣れる時間を設定する」「墨以外の画材を使用する」「筆以外の道具を使用しその組み合わせを工夫する」「偶然できた形に着目し見つめる時間を大切にする。」「技法の幅を広げる」「ICT については利用ありきではなく必要に駆られたときに利用する」などの手立てがあげられた。

第 3 回では、授業者の作成した指導案の原案をもとに検討を行った。前回出された内容をそのまま引き継いだ上で、新たに発見した技法を共有する場の設定と具体的な方法について意見交換を行った。「発見された表現を言葉に残す」ことを手立ての基本とすることが確認された。

第 4 回では、指導案の最終確認を行った後、推進委員により技法実験を行った。墨の濃さによる白抜き材との相性や表現の幅を体感した。

第 5 回では、当日と同じ内容の授業を別クラスで行い、推進委員で参観した。授業者の投げかけ方に

よる生徒の表現の違いを確認し、細かい部分の流れの微調整を行った。また、道具の精選を行い、準備する墨の濃さ、白抜き材を使用するタイミング、使用する紙の大きさ等を吟味した。さらに、ふり返りから片付けまでの流れを確認し、当日を迎えるのみとなった。

7 研究の成果と課題

本研究では、子どもたちの「表現の可能性」を信じながら「豊かな生き方」を目指していくという、大きな理想を掲げたものであった。そこに、授業者の思いをどのように注入していくかが1つのポイントとなっていた。構想の試行錯誤により「偶然の効果」を基本に据えたことで、のびのびとした活動から個々の潜在能力を引き出すことができた。また、その中で、「生徒と教師の関係性」がいかに表現に大きな影響を与えるかを実感することができた。

「水墨画」の実践により、様々な分野への提案ができたのではないか。多様な視点が結果的に次に繋がるための提案となった。

子どもから自然発生的に出された提案を積極的に受け入れ膨らませていくことでより表現を深めることができた。経験値が少ないというリスクを抱えながらさらなる深化を図るためにはどのような方策が必要か、今後の課題として残った。

生徒の素質を利用した授業であり、意図して作らなくても作品が完成していた。「美術」の中に取り入れるべきであるが、意図したイメージを目指してひたすら作り続ける活動とどのようにバランスをとっていくのか、いかにして相乗効果をうみだすのかが今後の課題として残された。

8 運営の成果と課題

「小規模組織でもできること」という割り切りから2年次がスタートした。結果的に「子どもの可能性」と「授業者の思い」をよりクローズアップすることができた。その分、運営面において会場校に多大な協力をいただいた。

当日は、郡市独自の美術関係組織「美育しんこう部」の研修を兼ねていたため、小学校・特別支援学校からも多くの参加があった。そのため、全体協議会での小グループ討議では、職種ごとの悩みや課題を共有することができた。

1 部会名 美術部会

2 郡市名 柏崎・刈羽 3 会場校 柏崎市立東中学校

4 研究会開催期日 令和 6年 11月 12日（火）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越市立柿崎中学校 校長	大塚 啓
(2) 研究推進責任者	柏崎市立第二中学校 教諭	阿部 昭比古
(3) 会場校責任者	柏崎市立東中学校 教頭	新保 隆之
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立東中学校 教諭(授業者)	菅原 由真
	県立近代美術館	上 雅次
	柏崎市立第一中学校 教諭	原 佳秀
	柏崎市立鏡が沖中学校 教諭	木下 実菜
	県立柏崎特別支援学校 教諭	齊藤 雅代
	県立はまなす特別支援学校教諭	佐藤 多恵子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月18日／東中	7	1年次の成果と課題について、当日の流れ
2	7月25日／東中	5	授業情報誌 Class 原稿について、題材構想・授業の流れについて
3	8月19日／東中	6	第2回全県部会の報告、参加案内範囲の確認、指導案検討
4	9月25日／東中	6	指導案検討、2次案内送付先の確認、事前準備、当日の日程、役割分担等について
5	10月30日／東中	5	授業参観、授業の流れ・指導案確認
6	11月11日／東中	5	準備会
	11月12日／東中	7	研究会当日
	12月17日／東中	5	指定研究の成果と課題について

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 30 ）名	(3) 小学校・高等学校教員 （ 13 ）名
(1) 郡市内中学校会員 （ 8 ）名	(4) 教育委員会・センター （ 1 ）名
(2) 他郡市中学校会員 （ 7 ）名	(5) その他（地域・保護者の方） （ 1 ）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
2年2組	水墨画	菅原 由真			

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体協議会	授業研究	上越市立柿崎中学校 校長 大塚 啓 様	柏崎市立第二中学校 阿部 昭比古教諭	

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 山 際 保 男
(学校名: 新潟市立東石山中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 美術部

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立新津第一中学校

4 研究主題

豊かな感性を養い、主体的に創造活動を楽しむ生徒の育成
～往還でひらめく深化した学び～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

本研究を推進するにあたり、前年度の研究推進委員会や新潟市中教研美術部内で「美術における学び合い」について意見交換や講演会を開催した。はじめのイメージから、試行錯誤しながら主題を生み出すことや対話を通して自分の考えを整理し、他者の考えに共感して自己変容につなげていくことが学習活動において大切になる、などの意見が出された。また、学習指導要領解説には、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要とある。

県中教研が掲げる生徒が「深い学びにいたる姿」を実現するためには、「できるかもしれない」「面白そう」が原動力となって行き戻りつつしながら、自分なりの答えにたどり着く工夫が必要である。そこで、本研究では、既習事項を活用しながら他者と意見交換をすることで自分のアイディアを磨き上げる。そして、互いの作品を鑑賞する学習活動から他者の良さや感じ方など多様な価値観を受け入れ、自分の見方や考え方を広げる時間を設けるようにする。協働的な学習活動による新たな視点や考え方に気づく設定により、生徒の表現意欲が持続され、深い学びの実現が図られると考える。

以上の点から、標記の研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

深い学びにいたるための取組について、以下の3点述べる。

① 視点・観点・論点を設定して思考や表現をする

ピクトグラムデザインのデザインに関する色・形の共通したルールを学習する。そこから視点・観点・論点を整理し、自分なりの主題を設定する。

② 仲間と練りあいや練り上げをする

グループで協働し、各々のアイディアを検討できる時間を作る。個人で考えたアイディアを、ICTを活用し、より面白く伝わるアイディアに構想する。他者から改善へのヒントを得ると同時に、自己の知識や発想を発揮して他者のアイディアを磨き上げる。

③ 学習モデルを活用して思考や表現をする

グループでの協働活動で学習したことを応用し、自己の作品制作の中で活用する。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・研究を始める前に、深い学びについて検討を重ね、1年次の研究成果をもとにしながら方策を検討し、研究を進めたことで深い学びについて理解が深まった。
- ・題材の魅力を引き出すことと、生徒が「できるかもしれない」「面白そう」と感じることができる導入の工夫を議論できた。そのため、題材において、考えるための視点・観点・論点が設定でき、自分なりの意味や価値を探りながら表現活動を行うことができた。
- ・ICTの利活用により、生徒が関わり合いながら熱心に話し合う姿が見られた。また、グループ内でアイデアを検討したことで、修正や改善へのヒントを得ることができた。
- ・自己の知識や発想を重ねながら他者のアイデアを磨き上げるために活発に意見交換できた。
- ・協議会では、生徒の様子を共有する時間を設けた。「深い学び」については、生徒がひらめく様子と表現の工夫について意見交換を行い、参加者が授業において感じたことを伝え合うことができた。また、「主体的に」について、「自分だったら」と「もっとこうすれば」という視点で話し合いを行った。気づきを共有することで、参加者も考え方や感じ方を広げることができた。

(2) 課題

- ・ICTは便利だが、会話や対話によるコミュニケーションを大切にすることが必要がある。
- ・学習活動が停滞する場面やグループがあった。指導者が事前に想定することで、生徒の様子をみとりながら有効な支援ができるよう改善したい。
- ・タイムマネジメントの部分でももう少し改善ができた。活動時間の確保やグループワークの時間配分、まとめやりフレクションなどを見直したい。プレ授業から修正した部分を参観することができればよかった。
- ・新潟市で定着してきた部分もあったため、「学習課題」と「まとめ」について議論が不足していた。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・1年次に実践した授業をもとに2年次取り組むことができたため、ポイントを絞り込みながら多様な意見にも柔軟に対応して授業検討を行うことができた。
- ・プレ授業で課題点が多く見付き、研究会までに修正ができた。
- ・研究推進委員の人数を増やし、全員が参加できなくても授業者の支援ができる体制を作った。また、zoomも活用して研究推進員が参加可能な範囲で協力してもらった。
- ・目標に向かって連携や協力して活動できた。授業者のために責任をもって着実に取り組んだこともあり、研究推進委員や参加者にとって有意義な研究となった。
- ・できる限りスリム化を目指した。具体的には、資料共有をロイロノートフォルダを使用し、校務支援システムで事前配布するなど印刷業務などの負担軽減を図った。また、参加申込をGoogleフォームを活用できた。

(2) 課題

- ・大規模な学校以外では、どの学校も1名しか教諭がいない状況である。校務上の都合もあり、研究発表に向けて多くの時間を費やすことが困難である。研究推進委員や部員との連携方法やお互いをフォローしていける組織編成を検討していく必要がある。

1 部会名 美術部

2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立新津第一中学校

4 研究会開催期日 令和 6 年 11 月 7 日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市総合教育センター・指導主事	堀田 雄大
(2) 研究推進責任者	新潟市立東石山中学校 教諭	山際 保男
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第一中学校 教頭	渡部 睦
(4) 研究推進委員 (授業者)	新潟市立新津第一中学校 教諭	青木 智
	新潟市立鳥屋野中学校 主幹教諭	田代 豪
	新潟市立白新中学校 教諭	近 まどか
	新潟市立新潟柳都中学校 教諭	竹田 辰生
	新潟市立上山中学校 教諭	山川 みずえ
	新潟市立寄居中学校 教諭	廣川 明人
	新潟市立山潟中学校 教諭	早川 敏明
	新潟市立亀田中学校 教諭	佐藤 智子
	新潟市立新津第二中学校 教諭	甲田 沙知代
	新潟市立濁川中学校 教諭	石井 隆浩

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 25 日／新津第一中学校	10	① 1 年次研究から今年度の方向性検討 ・ 目指す姿の実現に向けて、どのような手立てが有効か ・ 深い学びを実現する上で大切なポイントは何か
2	7 月 17 日／新津第一中学校	9	① 指導案検討Ⅰ 主に話し合いの視点や課題設定について議論した。
3	8 月 23 日／新津第一中学校	8	① 指導案検討Ⅱ 全県部会で指導いただいた内容をもとに指導案を見直した。 ② 研究会についての打ち合わせ
4	10 月 28 日／新津第一中学校	11	① プレ授業参観 授業の流れと ICT 利活用について再検討し、授業作りを行った。 ② 研究会の分担と流れの確認
5	11 月 7 日／新津第一中学校	13	① 2 年次研究発表会 ② 協議会
6	11 月 12 日／柏崎市立東中学校	2	① 上越地区 2 年次研究発表会参観 ② グループ協議参加

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (50) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (1) 名
(1) 郡市内中学校会員 (46) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (2) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3 年 4 組	デザイン「つぶやきのピクトグラム」 ～身の回りのあるあるをわかりやすく伝える～	青木 智

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者
授業協議会	・授業の振り返り ・深い学びについて	新潟市総合教育センター 指導主事 堀田 雄大 様	新潟市立東石山中学校 山際 保男 教諭 新潟市立鳥屋野中学校 田代 豪 教諭

令和5・6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 加藤 尚徳
 （学校名： 長岡市立旭岡中学校 ）

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 技術・家庭
- 2 郡市名 長岡市・三島郡 3 会場校 長岡市立宮内中学校
- 4 研究主題

持続可能な社会の実現に向けて、生活を工夫し創造する生徒の育成
 ～深い学びにいたる学習指導の工夫～

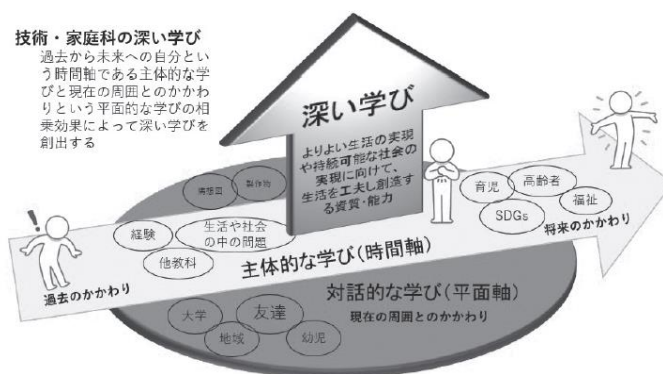
5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

これまでの県中教研技術・家庭部では、「生活を工夫し、創造しようとする生徒の育成」の基、「主体的・対話的で深い学び」について研究を進めてきた。そして、本研究では、これまでの成果を受けるとともに、「深い学びの20の技法」による深い学びの質的な向上を図りたいと考えた。

中越地区技家研究推進委員会では、これまで生徒自身が経験した課題を焦点化することによって、生徒は他者とのつながりを意識し、個々の学校や地域における自然環境を含む様々な条件下での実現可能な最適解を探りながら学習に取り組み、その過程において過去から未来へと続く時間軸の中で、持続可能な社会の実現に向けて、生活を工夫し創造していく姿を目指し、深い学びの姿を「持続可能な社会の実現に向けて、生活を工夫し創造する生徒」と設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

技術・家庭の深い学びについての視点は「主体的な学びとは過去から未来への時間軸の学び、対話的な学びとは現在の空間で学ぶ平面軸での学び、その相互作用で生まれるのが深い学びである。」としている（図1）。時間軸の学びの中から課題を見出し、問題解決的な実習を行うことにより既習の知識や技能が未来へとつながる学びとして更に深めることはできないかと考えた。考えた手立ては以下のとおりである。



ポイント1 生活の場面で課題の実態を把握・焦点化し、検証改善サイクルを設定する

R-PDCA サイクルを設定して活動を改善することを重要と考え、特に主体的な学びの自分自身の過去のかかわりの場面から、その先にある将来のかかわりの場面へとつながる課題を設定する。

ポイント2 課題に対して実現可能なプログラミングや保育実習の場面で幼児とのかかわり方として表現する

学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする場として、統合的な課題や保育実習を解決する場面を設けている。

ポイント3 実習や体験を通して得た知識を、将来の自分事として振り返る

生徒自身にとって、その場だけの問題解決だけでなく、将来の自分事として振り返り、過去から未来への時間軸の学びをさらに発展させていく。

7 研究の成果と課題

(成果) 協議会より

ポイント1にかかわって

領域のBとDをつなぐ統合的な学習内容であり、問題解決に取り組む課題設定であった。また、実際の製品の紹介もあり、実現されて役に立つことが明確になっていた。

生徒自身の経験から課題を設定できており、身近なスズメを課題の題材として取り上げシミュレーションすることで、視点を広げることができた。特に、野生動物との共生を解決方法に選び学習を進めることで、実生活の場面でも多角的な視点をもつことができた。

ポイント2にかかわって

他の生徒と情報を共有する機会が多く設けられており、仲間と確認し合いながら実現可能なプログラムの製作を試行錯誤しながら主体的に取り組んでいた。

自分たちが解決したい課題に取り組んでいくにつれて、新しい課題が発見されたり違う問題点にも気づくことができたりして、さまざまな課題が連動しており、やりがいのある

ポイント3にかかわって

プログラミングの際、トラブルシューティングしながら完成させることができた。また、プログラミングの一つ一つの成功体験が、目標とする形に近づいていることが感じられる内容であった。

(課題)

ポイント1にかかわって

実際の製品が紹介されたからこそ生まれる理想と現実のずれについて、どの程度教師側の指導で埋められるか、また、教師側が状況を整理してずれの幅を抑えられるかという点が明確ではなかった。

ポイント2にかかわって

プログラミングの製作が完了した際に、実際に試して製品に近い形で効果が期待できるかなど検証する場面が設定されておらず、問題解決のゴールが生徒に委ねられていた。課題解決のゴールを教師側が事前に示すことで、プログラムとしての機能向上や学習意欲の向上にもつながると考えられる。

ポイント3にかかわって

本時の中で、各グループの取組状況や課題を発表する場面が多く設けられており、情報を共有することで問題解決の糸口を見つけていた班が多く見られた。しかし、その情報を記録する媒体がなく、次の授業場面で振り返る資料が残っていないことが課題である。

8 運営の成果と課題

(成果)

2年間を見通しながら計画的に取組を進め、役割分担をしながら運営したことで、授業者は授業準備に集中することができた。また、会場校責任者の教頭先生をはじめとする先生方のご協力により、当日の会場準備や駐車場、案内、控室などの運営も支障なく行うことができた。

(課題)

教科の特性上、長岡市・三島郡だけでは教員数が少なく、プレ授業を含む実践数を増やすことができなかった。特に、1年目は研究の方向性が決まるまで時間がかかり、プレ授業は一公開となった。

- 1 部会名 技術・家庭
- 2 郡市名 長岡市三島郡 3 会場校 長岡市立宮内中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6年 11月 27日 (水)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	県立教育センター・指導主事	大野 敏法
(2) 研究推進責任者	長岡市立旭岡中学校・教諭	加藤 尚徳
(3) 会場校責任者	長岡市立宮内中学校・教頭	渡辺 元子
(4) 研究推進委員 (授業者)	長岡市立宮内中学校・教諭	高橋 清
	長岡市立南中学校・教諭	小竹 学
	長岡市立西中学校・教諭	中澤 直人
	長岡市立江陽中学校・教諭	本間 公嗣
	長岡市立大島中学校・教諭	根布 晶

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月28日 宮内中学校	6	2年次研究計画の確認、研究テーマの確認
2	7月29日 宮内中学校	4	指導案検討Ⅱ、Class 原稿の検討
3	8月19日 宮内中学校	6	協議題・協議会の進め方の検討、準備分担案について、プレ授業の実施案
4	9月27日 大島中学校	6	プレ授業 (長岡大島中)、当日配付資料 (学習指導案等) の確認
5	11月14日 宮内中学校	6	会場や授業の準備、明日の動きや準備分担等の最終確認
6	11月27日 宮内中学校	6	研究発表会、協議会
7	12月13日 宮内中学校	6	研究・運営の振り返り

7 研究会参加者 (参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (42) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (24) 名	(4) 教育委員会・センター (2) 名
(2) 他郡市中学校会員 (10) 名	(5) その他 (地域・保護者の方) (6) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3年1組	スマート農業の実現に向けて ～計測・制御のプログラミングの力で、より安全・安心な ハーブ栽培サポートシステムの開発を目指そう!～	高橋 清

9 分科会 (全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	「本研究の深い学びにいたるポイントの有効性等」	県立教育センター 指導主事 大野 敏法 様	長岡市立旭岡中学校 加藤 尚徳教諭	長岡市立旭岡中学校 加藤 尚徳教諭

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 霍間 厚浩
(学校名: 佐渡市立金井中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 技術・家庭

2 郡市名 佐渡市

3 会場校 佐渡市立新穂中学校

4 研究主題

実践的・体験的な活動を通して、学びを深める生徒の育成
～伝統文化と地域人材の活用～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

これまでの県中教研技術・家庭科部では「持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する生徒の育成」の基、「主体的・対話的で深い学び」について研究を進めてきた。

そして本研究では、これまでの成果を受けるとともに、「深い学びの20の技法」による深い学びの質的な向上を図りたいと考えた。

佐渡市には国内で唯一、宮大工を学べる専門学校「SADO 伝統文化と環境福祉の専門学校」がある。宮大工を目指す学生が全国各地から集まるこの学校では、志のある学生たちが伝統文化を継承するべく日々の修行(学習)に取り組んでいる。卒業生は沖縄の首里城や宮島の鳥居などの修復に携わっている。

本題材では、この「SADO 伝統文化と環境福祉の専門学校」から伝統建築大工学科の親方2名と学生をゲストティーチャーに招いた実践を行う。

生徒の深い学びの実現に向けて、製作学習を通じた地域人材との関わりの中から対話的な学びを推進するとともに課題解決的な題材構成により主体的な学びを推進する。このような取り組みにより、生徒の「深い学び」を実現できると考え研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

地域人材の活用と交わりにより生徒の新しい学びを保障し、既習の知識や技能を更に深めることを目指して次のような手立てにより研究主題を検証する。

(1) 知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする

既習事項を生かして加工方法を推測し、試行したうえで親方にプレゼンテーションを行う。推論を立て、実践し、修正する。このようなPDCAサイクルを学習課程に組む。

(2) 異なる多様な考えを比較して考える

ゲストティーチャー(学生)との関わりの中で多様な技術や技能を見たり、会話をしたりすることで技術や技能の向上を図る。その際に今までの学習してきた技術と学生から学んだ技術を比較し、評価・改善する。

(3) 学んだ知識や技能を活用して、思考や表現をする。

接合について釘や接着剤を使つての接合と今回学んだ接合方法を強度や経済性、環境への影響、経済などを視点に評価し、自分の作品にあった技法を選択・活用できるようにする。

7 研究の成果と課題

(1) 研究一年時の課題は次の通り

- ・授業のねらいの共有が親方とはできたが、学生との共有の時間を持つことができなかった。
- ・時間配分がうまくいかず、作業時間の確保ができなかった。
- ・生徒と学生とのコミュニケーションが当日のみとなつてしまい、対話を深める時間が少なかった。

(2) 一年時の課題を受けて

- ・授業の内容や手順を専門学校へ出向いて説明を行った。時間配分など事前に学生と共有した。
- ・この授業を行う前に箸づくり体験を行い、事前に学生と関わる時間を設定した。

(3) 地域人材とコミュニケーションをとって技能を身に付けることは、深い学びに有効であったか

A I等の発達により、知識は工夫をすれば多くの情報を集め、理解することで深めることができるが、技能は情報機器を提示・活用する部分も多々あるが、実際に間近で見て手にとってモノに触れることによって深い学びに直結する。本実践ではこの部分の確認であったが、さらに人間(講師)と人間(生徒)のふれ合いによつても対話的な学びが促進され、深い学びに向けて有効であったように思う。

また課題解決的な学習を学習課程に組み込むことで、常に課題意識を継続するようにした。講師と生徒のコミュニケーションをとる媒介にもなった。

(4) 課題として

協議会で、このような実践が佐渡地区のどの学校でも希望すれば行えるような仕組みができるとよい、あるいは継続的に行われるようにするとよい、というご意見を頂いた。多忙な学校現場において、地域連携は煩雑さを伴うので、こちらのご意見はこの研究実践の課題として核心ともいえる。

8 運営の成果と課題

運営上、佐渡での開催での大きな問題点は佐渡航路の時間にあわせることである。時間の制約があったとしても、協議会をもち、この場での意見交換を活性化することが、当研究会の大きな意義であると考えたので、以下のように協議の時間を捻出するための工夫をした。

- ・会場校校長や部長のあいさつ等を行わない。
- ・研究概要発表を紙面に代える。
- ・指導を紙面で行う。

短時間になってしまった協議会ではあるが参加者の方からは、些少であってもこのような時間をもててよかったの声を頂いている。

また、オンライン参加も募り2名から参加頂いた。協議会も参加して頂いた。これも遠隔地特有の参加形態であると思う。

何より当佐渡市では技術の免許を所有して授業を行っている教員が2名であり、わずか2名で研究から授業を同地区で公開するというのは、その内容からしても無理があると思われる。開催にあたっては一考をお願いしたい。

1 部会名 技術・家庭

2 郡市名 佐渡市 3 会場校 佐渡市立新穂中学校

4 研究会開催期日 令和 6年 10月 25日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	佐渡市立内海府中学校・校長	山口 智
(2) 研究推進責任者	佐渡市立金井中学校・教諭	霍間 厚浩
(3) 会場校責任者	佐渡市立新穂中学校	梶原 敦
(4) 研究推進委員(授業者)	佐渡市立新穂中学校	川原幾代子
	佐渡市立佐和田中学校	中澤 民枝

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/12 新穂中	5	前々年度副部長より情報提供・組織確認・計画立案
2	7/17 新穂中	4	テーマ・研究主題の設定 CLASS 原稿の検討①
3	7/25 新穂中	6	CLASS 原稿の検討② 指導案検討①
4	8/8 新穂中	4	CLASS 原稿の検討③ 指導案検討②
5	9/11 新穂中	5	指導案検討③ 研究発表準備検討①
6	10/16 新穂中	4	研究発表準備検討②
7	10/24 新穂中	6	前日準備
8	10/25 新穂中	6	研究発表会
9	12/18 新穂中	6	まとめ

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 (29) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (19) 名	(4) 教育委員会・センター (1) 名
(2) 他郡市中学校会員 (9) 名	(5) その他（地域・保護者の方） (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
1年A組	A 材料と加工の技術 生活に役立つ製作品を作ろう ～伝統文化から学ぼう～	新穂中学校 川原幾代子 教諭

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
分科会	「地域人材とコミュニケーションをとって技能を身に付けることは、深い学びに有効であったか」	佐渡市立内海府中学校 校長 山口 智 様	佐渡市立金井中学校 霍間 厚浩 教諭	当校教諭 川原幾代子

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

中越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 近藤 尚子
(学校名：小千谷市立南中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 特別活動

2 郡市名 小千谷市 3 会場校 小千谷市立南中学校

4 研究主題

夢や希望をもち、なりたい自分を実現しようとする生徒の育成
～特別活動を要とするキャリア教育の視点から～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領では、特別活動において目指す資質・能力の視点として「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」があげられている。また「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」も明記され、学級活動で「一人一人のキャリア形成と自己実現」に関する内容が位置付けられている。新潟県では、「郷土愛」と「基礎的・汎用的能力」をはぐくむために新潟の特色を生かしたキャリア教育の視点を設定し、全教育活動を通して重点的に行う教育として「新潟っ子をはぐくむキャリア教育」を進めている。以上のことから、小千谷市においても「自ら考え 心豊かに たくましく生きる 小千谷の子ども」の育成を目指し、おぢやっ子教育プランの基本理念に「夢や希望をもち、その実現に必要な力を育む」ことを重点テーマとして加えている。

本研究では、市内各校の実態を踏まえ、育成すべき資質・能力の視点である「自己実現」に焦点をあてる。「自己実現」を「なりたい自分を実現しようとする」姿と解釈し、学級活動（3）「一人一人のキャリア形成と自己実現」の展開を追究する。将来を展望し、自身の明るい未来を切り拓いていこうとする意欲を維持するには、小・中・高等学校の時間軸という縦のつながりと、各教科等の枠を超えて往還し、学ぶ意義の理解を深める横のつながりが相互に関連するキャリア教育が必要不可欠であると考え。その充実に向けたキャリア教育の要となる特別活動を通して、生徒が自分の考えをもち、他者と交流しながら、さらにその考えを広げ、自分の未来につなげようとする姿を目指す。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（1）新潟県キャリアアンケートの活用

新潟県では、4つの「基礎的・汎用的能力」に「郷土愛」をプラスして、キャリア教育の視点を設定している。自己評価用紙例として、この5つの視点を盛り込んだ全16項目のアンケート内容を提示しているが、これを一部自校化した20項目のアンケート結果と教職員の見取りを生徒の実態把握・比較・分析に活用する。

（2）特別活動を要とするキャリア教育についての研修の充実

専門分野とする指導者を招聘し、特別活動を要とするキャリア教育の進め方について研修を積む。また、他県の取組や資料も参考にして、充実した特別活動の実践に向けた手立てを探る。

（3）各教科・領域における実践

①自分の考えを他者に伝える活動の設定と実践

これまで実践していることを、さらに意識して授業展開を構想する。また、校内外の他者との交流を積極的に展開する。

②キャリア発達につながる気づきを意識した振り返り

各教科等において、学習内容と自身のキャリアについて考えさせる場面を設定する。今学んでいることが将来につながることを意識できるような振り返りを積み重ねる。

（4）各教科・領域の学びをつなぐ授業実践

各学年部を主体として、学期に数回のキャリア教育の要と位置付ける特別活動（学級活動（3））を

実践する。その際には、将来を見通す活動の記録や学習活動を振り返る記録、キャリアアンケートなどをファイリングした「キャリア・パスポート」を活用し、自身の変容や成長に気づくための手立てとする。

(5) 深い学びの技法

令和6年度新潟県中学校教育研究会の重点1に示された「深い学びの技法」の中から、主に3つの技法を組み合わせ手立てとして活用する。

① 学んだ知識を活用して課題や目標を設定する（深い学びの技法No.1）

これまでの学びをもとに、自分が取り組むべき課題を見つけ、その課題解決に向けた目標を立て具体的な行動に移す。キャリア・パスポートから自己の成長を振り返り、課題設定のきっかけをつかむ。

② 異なる多様な考えを比較して考える（深い学びの技法No.8）

学びは他者との協働やフィードバックを通じて深化し、改善されることで、より良い成果を生み出す。自分にはなかった視点や気づきを比較し合い、考えを練り合う活動となるよう、思考ツールを用いて考えを可視化する。

③学んだことを生かして、次の新しい課題を作る（深い学びの技法No.20）

特別活動は「なすことによって学ぶ」学習である。決めたことを実践し、定期的に振り返ることで自己実現に向けて自分がなすべきことの意識化を図る。また、その結果を分析して次の新たな課題解決に生かすというPDCAサイクルの経験を積むことで、主体的に資質・能力を体得できるようにする。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・キャリアアンケートの実施により、生徒の意識変容を比較・分析することができた。自己実現に関連するアンケート項目については、市内ほとんどの学校において肯定的回答が増加した。
- ・「特別活動を要とするキャリア教育」の解釈を得て、授業計画検討→授業実践→振り返り→改善策というサイクルを回すことができた。それによって、「各教科等の学びをつなぐ授業実践」を重ねることができた。
- ・キャリア教育の視点を視覚的に捉えやすくすることを目的として作成したアイコンは、どの学習活動にも使うことができ、提示によって活動の目的に立ち返ることができる有効なツールとなった。
- ・思考ツールとして作成したマインドマップは、視覚的に捉えやすく、思考を整理したり、他者の考えをつなげ合わせたりすることに効果的であった。次年度にさらに付け加えるなどの活動が新たな視点を得る手立てとなるのではないかな。
- ・異学年交流が有効な場面を示すことができた。大事に思う事の傾向の違いが明確で、自分にはなかった視点や気づきを比較し合い、考えを練り合う活動となった。

(2) 課題

- ・生徒自身が、各教科等の学びがつながっていると自覚できるような手立てが必要である。ワークシートをキャリア・パスポートに保管し、3年生の活動時に振り返るなどして、自身で成長を感じとれるように活用する。
- ・他者の貴重な意見を生かすために、自分ごととして考える時間を多く確保する必要がある。
- ・特別活動を要としたキャリア教育の取組を次年度以降各校の指導計画に反映させ、自校化を図る。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

- ・特別活動の研究は、教科と違って市全体として取り組みやすかった。全学校で授業公開をし、その知見を活かして研究をアップデートすることができた。研究推進委員の役割分担ができた。
- ・参加者集約、事後アンケートにはGoogle フォームを活用し、運営を円滑に進めることができた。

(2) 課題

- ・校務支援システムを活用するなどして、市内会員をもっと巻き込む工夫や手立てが必要である。
- ・要項や資料の事前配信をしたが、研究発表会当日持参者が半数程度であった。当日全員配布にするか事前配信案内の周知を徹底するなどの手立てが必要である。

- 1 部会名 特別活動
- 2 郡市名 小千谷市 3 会場校 小千谷市立南中学校
- 4 研究会開催期日 令和6年11月21日(木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学大学院・教授	山田 智之
(2) 研究推進責任者	小千谷市立南中学校・教諭	近藤 尚子
(3) 会場校責任者	小千谷市立南中学校・教頭	今井 基春
(4) 県・郡市指導主事	小千谷市教育委員会・管理指導主事	上村 一彦
(4) 研究推進委員(授業者)	小千谷市立南中学校・教諭	中川 芳隆(授業者)
	小千谷市立小千谷中学校・教諭	小片 宏記
	小千谷市立東小千谷中学校・教諭	本間 遥那
	小千谷市立千田中学校・教諭	金澤健太郎
	小千谷市立片貝中学校・教諭	布川 恭子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	4/17 小千谷市民会館	8	研究組織の確認、1年次における成果と課題、2年次の取組、具体的な計画
2	5/14 小千谷市立南中学校	8	第1回全県部会内容伝達、片貝中学校公開授業計画
3	5/24 小千谷市立片貝中学校	7	片貝中学校2年学級活動授業(羽二生先生「働くことの意義」)、協議、各校取組のまとめ方・掲示の仕方
4	8/21 小千谷市民会館	7	千田中学校公開授業について、南中学校公開授業指導案検討、指導者指導、研究発表会計画、Class 原稿
5	10/8 小千谷市立千田中学校	7	千田中学校2年学級活動授業(推進委員:金澤先生「合唱祭の成功に向けて」)協議、南中学校公開授業指導案検討、研究発表会実施計画案、協議会・協議題案、各校取組のまとめ方・掲示の仕方
6	11/5 小千谷市立南中学校	7	下越地区研究発表会報告、南中学校公開授業指導案検討、各校取組のまとめ、研究発表会実施計画案、研究の概要案
7	11/20 小千谷市立南中学校	8	研究発表会会場準備
8	11/21 小千谷市立南中学校	9	研究発表会
9	12/6 小千谷市立南中学校	8	研究・運営の振り返り(成果と課題)

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (83) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (15) 名
(1) 郡市内中学校会員 (25) 名	(4) 教育委員会・センター (2) 名
(2) 他郡市中学校会員 (40) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (1) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
2年A組	理想の3年生になるために	中川 芳隆

9 全体協議会

協議題	指導者	司会者	授業者
「各教科の学びをつなぐ授業実践」(本時)の成果と改善案 ②自己実現に向けた自校での学級活動実践例について	上越教育大学大学院 教授 山田 智之 様	小千谷市立 東小千谷中学校 本間 遥那 教諭	小千谷市立南中学校 中川 芳隆 教諭

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

下越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 松川 香奈恵
(学校名: 阿賀野市立京ヶ瀬中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 特別活動（下越地区）

2 郡市名 阿賀野市 3 会場校 阿賀野市立水原中学校

4 研究主題

他者を認め、望ましい人間関係を築いていく活動の工夫
～自ら課題を見つけ、共有して課題解決を目指す生徒の育成～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領の特別活動の目標において、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせながら育成を目指す資質・能力の重要な視点の一つに「人間関係形成」がある。この「人間関係形成」に必要な資質・能力は集団の中において、特別活動の学習過程全体を通して個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられており、「年齢や性別、考え方や関心、意見の違い等を理解したうえで認め合い、互いの良さを生かすような関係をつくること」が大切であるとされている。

水原中学校では、生徒の実態から「自分と価値観や考え方が違っても、そのこと（人）を認めることができる生徒」を目指す生徒像の一つに掲げている。目指す生徒像を具現化するためにも「望ましい人間関係の在り方」について考えることが重要であると考えた。そこで、本研究では、「望ましい人間関係を基盤とし多様な考えを受容し、認め合いながら、自身の考えを伝えたり、広げたり、深めたりしてお互いが折り合いをつけた納得解を導き出す姿」を目指す深い学びの姿として、研究を進めた。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（1）生徒の学びの段階を、「準備段階期」、「実践期」、「まとめ期」の3つの期に分け、段階的に活動を進めた。

① 準備段階期…人間関係づくり、ソーシャルスキルの向上。課題提起。

生徒同士のコミュニケーションを円滑に行い、望ましい人間関係を構築するための基盤をつくるためにSGE（構成的グループエンカウンター）、相手を認める活動、感謝を伝える活動などを進める。また、アンケートを実施し、解決しなければならない課題を生徒が自分事ととらえ、解決したいと思える課題提起を行う。

② 実践期…他と関わりながら課題解決の方策を考える

なかよし子どもサミット（小中連携交流事業）、いじめ見逃しゼロスクール集会を通して、学年、校種を超えて望ましい人間関係について考えを深める。意見を述べ合う中で、相手の気持ちを受け止めたり、折り合いをつけたりして合意形成を図れるようにする。

③ まとめ期…活動の振り返り

②の実践期の話し合いの中で示された様々なアイデアや課題解決の方策を意識し、集団で合意形成したことを日々の生活につなげ、活かしていく。

（２）深い学びの技法の活用

「深い学びの技法」から、以下の３つの手立てを組み合わせ活用する。

① 思考：異なる多様な考えを比較して考える No. 8

小グループ（学級、学年、異校種）で交流活動を行い、自分にはなかった考え方や視点に触れることで、新たな課題の発見や互いの理解を深めることにつなげる。

② 解決：仲間と練り合いや練り上げをする No. 10

課題を見だし、話し合いを通してさまざまな立場から課題解決の方策を考える。

③ 表現：自分の言葉で学んだことを整理しまとめる No. 15

活動を振り返り、学んだことや感じたことを自分の言葉でまとめることで、その後の自分自身の生き方に活かしていくことができる。

7 研究の成果と課題

水原中学校で毎年行われる小中連携事業「なかよし子どもサミット」において、中学校区３校の小学校６年生と水原中学校３年生が交流し、小中における共通の課題（人間関係づくり）について解決策を考える活動を進めた。

【成果】

- ・交流活動では、事前に作成したポスターを掲げ、小学生を温かく迎える姿が見られた。また、小学生の質問に中学生が答える時間では、中学生がうなずきながら話を聞いたり、熱心に質問に答えたりする姿が多く見られた。準備段階から SGE（構成的グループエンカウンター）を様々な集団で繰り返し行ってきた結果が成果として現れたと考えられる。
- ・話し合いの場では、多くの意見を出せるよう相手の意見に共感する言葉をかけたり、付せんを使ってお互いの考えをまとめようと工夫したりする中学生の姿が見られた。色分けした付せんで小学生と中学生と意見を分類したり、同様の意見をグルーピングしたりするなど、視覚的な工夫が見られた。
- ・異学年交流によって、他者と自分の考え方を比べ、違いに気づくことができた。

【課題】

- ・小中共通の課題を解決していくために「相手を認めていくためにどんなことを大切にして、そのためにどんな行動をしていきたいか」をテーマに小中のグループ毎に話し合いを進めた。互いの意見を発表するにとどまり、折り合いをつけたり、合意形成したりすることが難しかった。課題を自分ごととしてとらえるには、課題の内容をより具体的にするなど工夫が必要である。
- ・シェアリングの時間が短く、合意形成のための話し合いの時間を十分にとることができなかった。多くの意見が出た中で、「何が一番大切か」という課題で合意形成をはかる場面があったが、「全部大切」と考えを受容して認めるといった面では評価できるが、その後、具体的な行動につなげるためにもより深く議論できるよいという意見もあった。

8 運営の成果と課題

【成果】

- ・昨年に引き続き、研究推進委員を阿賀野市内で組織することで、情報共有が図りやすかった。

【課題】

- ・研究推進委員会実施の計画を事前に検討し、研究推進委員や他の先生方と役割分担を行い、多くの方に研究に携わってもらえるよう工夫が必要であった。
- ・小中連携の観点から、小学校側と授業の内容、運営面での打ち合わせを行えるとよかった。

1 部会名 特別活動（下越地区）

2 郡市名 阿賀野市

3 会場校 阿賀野市立水原中学校

4 研究会開催期日 令和 6年 10月 30日（水）

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	村上市立村上南小学校・校長	磯部 睦
(2) 研究推進責任者	阿賀野市立京ヶ瀬中学校・教諭	松川 香奈恵
(3) 会場校責任者	阿賀野市立水原中学校・教頭	本保 逸彦
(4) 研究推進委員(授業者)	阿賀野市立水原中学校・教諭	前田 健太郎
	阿賀野市立安田中学校・教諭	近藤 卓
	阿賀野市立笹神中学校・教諭	井上 翔

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月16日/水原中学校	5	・研究組織（研究推進委員、指導者）の確認 ・研究会に向けての単元構成・指導案の作成 ・C l a s s の原稿作成
2	8月19日/水原中学校	5	・指導案の再検討 ・C l a s s の原稿確認
3	9月3日/水原中学校	11	・研究会に向けての協議 研究の概要確認 授業案検討 ・ご指導 村上市立村上南小学校 校長 磯部 睦 様
4	10月8日/水原中学校	5	・研究会指導案の最終確認 ・研究会当日の日程と協議会の進め方 ・準備と役割分担
5	10月30日/水原中学校	7	・研究会「なかよし子どもサミット」 全体会：研究の概要説明 授業公開：「なかよし子どもサミット」小中連携事業 協議会：「深い学びにいたるための3つの技法は有効であったか」 ご指導：村上市立村上南小学校 校長 磯部 睦様

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数 （ 29 ）名	(3) 小学校・高等学校教員 （ 0 ）名
(1) 郡市内中学校会員 （ 27 ）名	(4) 教育委員会・センター （ 0 ）名
(2) 他郡市中学校会員 （ 2 ）名	(5) その他（地域・保護者の方） （ 0 ）名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者	学年・組	単元・主題	授業者
3学年	なかよし子どもサミット	前田 健太郎			

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	深い学びにいたるための3つの技法は有効であったか	村上市立村上南小学校 磯部 睦 様	阿賀野市立安田中学校 近藤 卓教諭	水原中学校 前田健太郎

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

上越地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 中澤 優子
(学校名: 上越市立頸城中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 総合的な学習の時間
- 2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立三和中学校
- 4 研究主題

ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える生徒の育成
～ 探究サイクルとデザイン思考サイクルの往還による地域のヒト・コト・モノをつなぐ実践を通して ～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

人口減少が進む三和区において、今後三和区の未来を担う若者に目指してほしい姿やその姿の実現に向けて必要となる資質・能力について地域関係者（三和区総合事務所、三和区振興会、地域コーディネーター）と話し合った。郷土愛を胸に、自分の将来を切り拓き、三和区のことをこれからも思い続ける生徒を目指してほしいという地域の方の願いと、三和中学校の教育目標から「ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える生徒」という主題を設定した。

また、主題の実現に向けて必要となる資質・能力を「地域共生力」「創造的課題解決力」「協調性」の3つにまとめ、以下の手立てを講じた。

資質能力(知技/思判表/主態)	内容（≒目指す深い学びの姿）	手立て
① 地域共生力 (知技/思判表/主態)	地域の魅力や課題を理解し、郷土愛を胸に、身に付いた力を生かしながら、自分の将来と地域の未来を掛け合わせ、地域の発展・創造に向けて考え続ける力	①三和区魅力発信事業に参画する。 ②所長と共に三和区の魅力や課題を考える。 ③探究サイクルとデザイン思考サイクルの往還することで地域のヒト・コト・モノをつなげ、三和区の魅力をより深く理解する。 ④自分の将来と地域貢献の方法を掛け算で考える。
② 創造的課題解決力 (思判表)	地域や企業の課題を解決するために、他者と知恵を振り絞って新しい価値を生み出し、相手意識や目的意識をもってわかりやすく表現する力	①デザイン思考サイクルをもとに、共感マップから課題を設定し、課題解決に向けて計画を立て、試行錯誤しながら課題を解決する。 ②三和区魅力発信事業の創作活動（新商品、PR映像、観光マップ、チラシ）を通して、創造性を高める。
③ 協調性（主態）	地域の特徴やよさを生かした活性化を進めるために、他者の思いや考えを理解し、自分のよさや仲間のよさを生かしながら他者と*根張り強く課題解決に向けて進む力 *「根張り」＝根を張るように根気強く、信念をもって	①三和区魅力発信事業にグループで協働的に課題解決を行う。 ②クラス会議や SST 等で互いを認め合い、安心して発言できる集団づくりを行う。

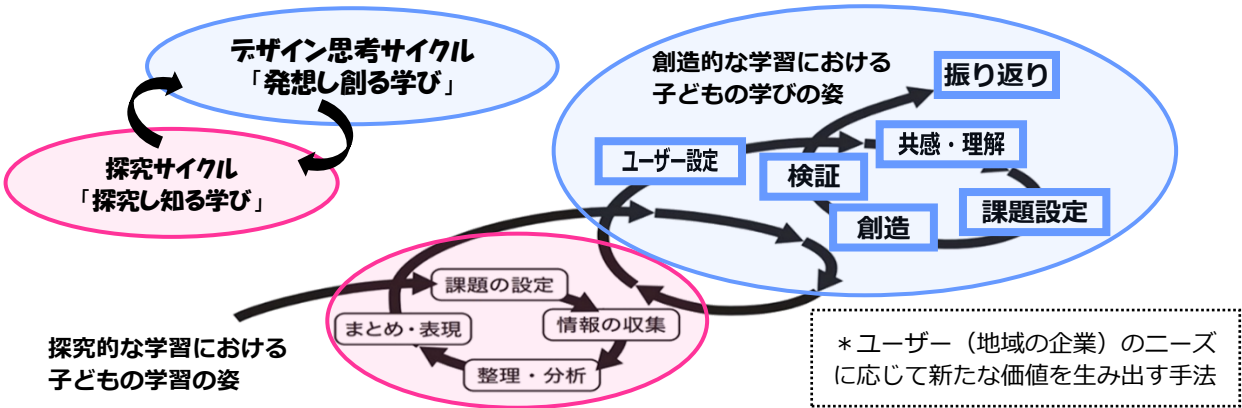


図1. 3つの資質・能力をバランスよく育成する探究サイクルとデザイン思考サイクルの往還

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

三和区総合事務所及び三和区振興会が主催する『三和区魅力発信事業（地域活性化プロジェクト）』に参画し、地域の10企業団体と連携して「地域共生力」「創造的課題解決力」「協調性」の3つの資質・能力の育成を図った。以下に、深い学びの技法と照らし合わせて研究内容をまとめる。

設定 ①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する

単元ガイダンスで学んだ三和の魅力や課題の知識を生かしながら、共感マップをもとに企業にインタビューを行い、「甘麴蜜を使用したクラフトコーラはどうしたら若者向けの味になるのか」という課題を設定した。

共感・理解②：担当者の悩みや考えを共有

さんわのみらい

② 共感マップをもとに、担当者の思いや考えを聞いて担当者の悩みを共有しましょう。

課題を明らかにする

Copyright 2023 Senwa, JHS. All Rights Reserved.

解決 ⑩仲間との練り合いや練り上げをする

企業に提案した香辛料や甘味料が入ったクラフトコーラを試飲し、仲間とどのようなものを入れるとコンセプトに合ったコーラになるのか話し合った。シナモンとクローブの割合を細かく設定し、レモン果汁を加え、刺激的だがマイルドなコーラに仕上げた。

思考 ⑤資料やデータに基づいて考察したり検証したりする

若者向けのクラフトコーラの開発に向けて、クラフトコーラによく使われている香辛料や甘味料を調べ、一覧表にまとめた。全国のクラフトコーラを取り寄せ、実際に試飲しながら香辛料や甘味料の相性を確認した。入れるべき香辛料や甘味料を企業に提案した。

スパイスの種類	辛さ	刺激味	コリアンダー	甘い	甘香ばい
シナモン	甘い	マイルドな風味	ナツメグ	加熱すると刺激がなくなり特有の甘くスパイシーな香り	
カルダモン	辛い	ピリッとした刺激的	ヒバツ	シャープな辛さとほんのりとした甘さ	
クローブ	甘い	舌にしびれる刺激味	オールスパイス	シナモンクローブナツメグの香りがミックスした深みがある	
ブラックペッパー	辛い	さっぱりとした香り	ジンジャー	生薑の香り、辛み成分が生の生薑より豊富	
			バニラビーンズ	甘い	甘い香り

表現 ⑮自分の言葉で学んだことを整理し、まとめる

評価 ⑲学習成果と自己との関わりを振り返る

右図のように今回のプロジェクトで身に付いた力をまとめ、身に付いた力を生かしてどのように地域に貢献していくのかについて考えた。自分将来と地域貢献を掛け算することで新たな貢献方法を地域の方に語った。

7 研究の成果と課題

- 探究サイクルとデザイン思考サイクルの往還により、3つの資質・能力をバランスよく育成することができた。
- 郷土愛に関するアンケート項目（三和に愛着があるか/誇りに思うか）の数値が上昇し、単元ガイダンス時よりも誇りに思う記述内容が具体的なものになった。
- 自分の将来と地域の未来を掛け合わせることで、具体的な貢献方法を生み出し、自信をもって自分の夢と地域への貢献方法について地域の方に語ることができていた。
- 10企業団体とも共通の学習過程で学習したものの、創造したものが異なったことから発揮された創造的課題解決力に差異が生まれた可能性があった。

8 運営の成果と課題

- 研究推進委員会を定期的に開くことで、単元のまとめに向けて、授業内容を軌道修正することができた。
- 実践校の負担が大きく、事前準備や片付けまですべて実践校中心で行ってしまった。

1 部会名 総合的な学習の時間

2 郡市名 上越市

3 会場校 上越市立三和中学校

4 研究会開催期日 令和 6年 11月 28日 (木)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学・特任教授 妙高市立妙高中学校・教頭	釜田 聡 関原 和人
(2) 研究推進責任者	上越市立頸城中学校・教諭	中澤 優子
(3) 会場校責任者	上越市立三和中学校・教諭	古澤 徹
(4) 研究推進委員(授業者)	上越市立三和中学校・教諭	山川 純
	上越市立八千浦中学校・教諭	高橋 沙友里
	上越市立直江津東中学校・教諭	山川 智美
	上越市立名立中学校・教諭	白鳥 友紀子

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7/12／三和中学校	7	研究の経緯と今年度の方向性について
2	10/11／三和中学校	4	研究会に向けての授業検討会（指導案検討①）
3	11/1／三和中学校	6	研究会に向けての授業検討会（指導案検討②）
4	11/18／三和中学校	6	研究会に向けての授業検討会（指導案検討③）
5	11/28／三和中学校	8	研究会当日

7 研究会参加者（参加者数と内訳）

研究会参加者総数	(65) 名	(3) 小学校・高等学校教員	(2) 名
(1) 郡市内中学校会員	(33) 名	(4) 教育委員会・センター	(5) 名
(2) 他郡市中学校会員	(6) 名	(5) その他（地域・保護者の方）	(19) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3 学年	地域活性化プロジェクト① (単元ガイダンス：三和の魅力や課題は何？)	山川 純
3 学年	地域活性化プロジェクト② (企業同士のつながりや差異を出すためには？)	山川 純
3 学年	地域活性化プロジェクト③ (企業への提案、発表練習会)	山川 純
3 学年	地域活性化プロジェクト④ (地域の方への成果発表会)	山川 純

9 分科会（全体協議会）

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
第1分科会	本時の生徒たちの姿は主題に迫ることができていたのか？	上越教育大学 特任教授 釜田 聡 様	上越市立三和中学校 古澤 徹 教諭	当校教諭 山川 純

令和6年度 県中教研指定研究 成果の概要報告書（2年次）

新潟地区中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 吉田 新
(学校名：新潟市立東新潟中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 総合的な学習の時間

2 郡市名 新潟市

3 会場校 新潟市立新潟柳都中学校

4 研究主題

問題解決や探究活動に、主体的、創造的、協働的で深い学びにいたる授業を通して、自己の生き方を高める生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

総合的な学習の時間においては、探究的な学習過程を通して、主体的に問題を解決する資質や能力を育成することが求められている。そのために、教科横断的に学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動において、主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育て、自己の成長を自覚し自信をもったり、他者の見方・考え方から最適解・納得解を選んだり、挑戦することで新たな価値を生み出したりなど、自己の生き方につなげることができる生徒の育成を研究主題とした。

「しもまち」の活性化を願う地域や行政の方の想いや取組を受け、情報収集、調査、専門家に聞くなどして、地域の一員として主体的に活性化案を考え、共感させるプレゼンができるよう工夫する。そして、実際に、地域や行政の方などに活性化案を説明し、生の声を聞きながら、自分たちの想いと地域の想いをフィットさせ、よりよい案になるよう共に創出していく。アントレプレナーシップ教育の視点を取り入れた学習活動を通して、地域愛だけでなく、主体性、協働性、創造性や課題解決のための方法を身に付け、これからの社会で発揮していこうとする姿を目指す。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

○本単元における授業の手立てや工夫として以下の内容があげられる。

深い学びの技法1：学んだ知識を活用して課題や目標を設定する

・しもまち地域について、自分たちなりのしもまちのよさ、課題、未来を考える。その後、しもまち地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方から講演を頂き、現状や願いを聞くことで、自分たちが思っているより深刻であることに気づき、課題意識をもつことができるようにする。

・しもまちの活性化に向けて、自分が提案したいこと、理想とするしもまちなどを思い思いに描き、それを共に考え、行動を起こしていく仲間を見つけることで、「もっと考えたい」「実現してみたい」「地域の役に立ちたい」などの気持ちを高め、主体的に学習に取り組んでいくことができるようにする。

深い学びの技法6：複数の資料や観察結果の比較から結論を導く

・インターネットを使って調べるだけでなく、実際にしもまちの現状を見たり、聞いたりすることで、自分たちがしたいと思うことと地域のニーズが合致しているか確かめたり、実際のニーズを踏まえて自分たちの活性化案を考え出すことができるようにする。

深い学びの技法9：学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする

・自分たちが考えた活性化案について、より実現度を高めるために、専門的な立場の方々からアドバイスをいただき、それを踏まえて練り直すことができるようにする。

深い学びの技法13：理由や根拠を示して論理的に説明する（本時）

・地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方をお招きして、自分たちが考えた活性化案を提案する場を設定する。短い時間でどれだけ相手を惹き付け、実現に向かえるか、協働者を作れるか。共感させるプレゼンにするために、提示、順番、見せ方、声の出し方等も工夫し、論理的に魅力的にプレゼン（ピッチ）できるようにする。

深い学びの技法 10：（ともだちと）練り合いや練り上げをする（本時）

・地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方にグループに入ってもらい、活性化案のプレゼン（ピッチ）を聞いてもらい、フィードバックを頂きながら、ともによりよい案に練り上げていく。自分たちの想いだけでなく、相手の想い、願い、ニーズともフィット（合致）させて、実現できるようにする必要がある。

深い学びの技法 18：身につけた資質・能力をメタ認知し成長につなげる

・この単元で目指す資質・能力をルーブリック表に表し、単元途中と単元末に生徒が自己評価を行うことで、自分が身につけた力を確認したり、成長を確認したりできるようにする。

7 研究の成果と課題

研究指定発表校では、「アントレプレナーシップ教育」の視点を取り入れ、3年間を見通した教育課程を編成しており、その中で最終単元となる3年生の単元について、県中教研研究推進委員会を中心に研究を行った。昨年度は、総合的な学習の時間における深い学びにいたる手立てとして、評価の場面や方法について議論し、他者（特に学校外部人材）からの評価とルーブリック評価の有効性を検証することが課題に挙がった。そこで、今年度は、前者を授業公開場面で取り入れることとし、深い学びを促すことができたのかを会員で協議した。

成果：他者として学校外部人材を選び、授業に位置づけることは、生徒の主体性を引き出し、視野や見方・考え方を広げ、課題解決や探究の過程を充実させることができるため、深い学びにいたる手立てとして有効であることを会員と共有できた。また、総合的な学習の時間の教育課程編成のポイントや、地域との連携の仕方、教職員間の協働の必要性も、各校の参考とすることができた。

課題：外部人材との協働から得られた学びを生徒が自分の生き方につなげる振り返りが必要である。本時では、その時間をとっていなかったため、次時にどんな振り返りをすると深い学びにいたるのか、工夫を凝らすことが大切である。また、グループ間、個人間に成果物や活動に差がでていた場面があり、教師による手だて、介入、支援のさらなる工夫や程度を今後研究していく必要がある。

8 運営の成果と課題

昨年度とほぼ同じ研究推進委員のメンバーで継続して運営を行った。研究二年目となり、昨年度の反省を生かしてより有意義が研究となるよう尽力した。

成果：研究推進委員会を複数回開催し、進捗状況や課題を話し合うなど計画的に研究を推進できた。授業公開日までに必要な準備分担、授業公開日の役割分担等、研究推進委員会と発表校職員とで協力しながら進めることができた。

課題：今回は、80分授業の中で60分を公開時間としたが、総合的な学習の時間の公開時間が難しい。よって、全体会や協議会の日程設定が難しい。授業時間や公開時間が長いと発表校職員、生徒、参観者の負担が大きいが、領域の特性上、授業時間が短いのも難しい。また、新潟市外の参観者が多くなるよう、周知の仕方に工夫が必要。今回、発表校では、県内の行政職の方々からもご意見をいただきましたが、案内が届いていないようだった。

- 1 部会名 _____ 総合的な学習の時間
- 2 郡市名 _____ 新潟市 _____ 3 会場校 _____ 新潟柳都中学校
- 4 研究会開催期日 令和 6 年 10月 4日 (金)

5 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立岩室中学校・校長	小塚 忠昭
(2) 研究推進責任者	新潟市立小針中学校・教諭	吉田 新
(3) 会場校責任者	新潟市立新潟柳都中学校	瀬野 大吾
(4) 県・郡市指導主事	新潟市教育委員会学校支援課・総合担当指導主事	齋藤 まゆみ
(4) 研究推進委員(授業者)	新潟市立新潟柳都中学校・教諭	井上 美恵
	新潟市立金津中学校・教諭	熊谷 純
	新潟市立木崎中学校・教諭	長谷川 雅志
	新潟市立亀田中学校・教諭	齊木 めぐみ

6 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6.6.20/新潟柳都中学校	5	・指導者について・予算について・研修計画について
2	6.7.25/大形中学校	6	・指導案検討・今後の研修について
3	6.9.19/東新潟中学校	8	・二年次研修の最終打ち合わせ
4	6.12.13/胎内市立中条中学校	1	・先進校視察
5	6.12.25/胎内市立中条中学校	1	・先進校視察

7 研究会参加者(参加者数と内訳)

研究会参加者総数 (72) 名	(3) 小学校・高等学校教員 (0) 名
(1) 郡市内中学校会員 (64) 名	(4) 教育委員会・センター (3) 名
(2) 他郡市中学校会員 (5) 名	(5) その他(地域・保護者の方) (0) 名

8 公開授業

学年・組	単元・主題	授業者
3学年	「しもまちプロポジション(しもまちの活性化を地域住民とともに創出しよう!)」	教諭 長部 賢 教諭 野田真里奈 教諭 関 奈緒 教諭 大野綾子

9 分科会(全体協議会)

分科会名	協議題	指導者	司会者	提案者
全体会①	単元計画の共有		新潟市立東新潟中学校 吉田 新教諭	当校教諭 井上 美恵教諭
全体会②	本時での深い学びの技法(技法10・技法13)は、有効であったか。	新潟大学経済科学部 准教授 伊藤 龍史 様 新潟市教育委員会 学校支援課指導主事 齋藤まゆみ 様	新潟市立東新潟中学校 吉田 新教諭	当校教諭 井上 美恵教諭 長部 賢教諭 野田真里奈教諭 関 奈緒教諭 大野綾子教諭